

一 遺跡の位置と環境

阿蘇は九州の中央に位置する典型的な複式火山であり、世界屈指のカルデラを擁する傑岬である。阿蘇外輪山及びカルデラ内火口原は、大きく南北に分けられる。阿蘇外輪山は立野の火口瀬を境に南北に分けられ、北側外輪山は海拔標高900m程度と低平であるのに対して、南側外輪山は海拔標高1000m以上で峰勢は起伏に富む。また火口原は、中央火口丘の北麓から北側外輪山にかけての低地を阿蘇谷、中央火口丘南麓から南側外輪山にかけての低地を南郷谷と呼ぶ。阿蘇谷には、外輪山裾野の火山灰黒土中を黒川が蛇行している。海拔標高は470～510mと高低差が比較的小さく、また地下水位が高いこともあいまって、耕地の約85%は水田である。一方、白川が貫流する南郷谷は海拔標高が300～700mで、阿蘇谷に比べ狭隘であり、耕地中、水田の占める割合は56%である。阿蘇カルデラ内では、年間平均気温が阿蘇町・内牧で13.1℃と、熊本市内と比較して3℃ほど低く、準高冷地の気候を呈している。阿蘇谷・南郷谷は共に、阿蘇の不断の火山活動により厚く堆積した火山灰の酸性土壌であるが、大小の河川と湧水を背景とする低湿地が広がっており、水稲耕作を可能にする地理的環境を充足している。阿蘇町宮山遺跡では、弥生時代終末期の住居址から2粒の炭化米が出土しており、また同町陣内遺跡では弥生時代後期の住居址から鉄製の摘鎌が出土している。これらの遺物は阿蘇谷が少なくとも弥生時代後期には、平野部と同様に農耕社会に突入したことを物語っている⁽¹⁾。

外輪山内壁が急崖をなす一方で、その外側にはなだらかな高原が広がる。阿蘇三大原と呼ばれる端辺原野、波野原、大矢野原がそれで、阿蘇の北西部、東部、南西部にそれぞれ展開している。端辺原野は鞍岳と矢護山東部に広がる海拔標高850～950mの高原で、北西方向に侵食谷が多く形成され、これらの小河川は菊池川を介して有明海に流れ込んでいる。波野原はその名の如く、波浪状の起伏が緩やかな海拔標高700～800mの高原で、3～4万年前に噴出した火砕流堆積物と火山灰から形成される。大矢野原は現在の上益城郡矢部町を中心に広がる。海拔標高は500m程度で、八勢川・亀谷川・上鶴川の支流によって開折されている。

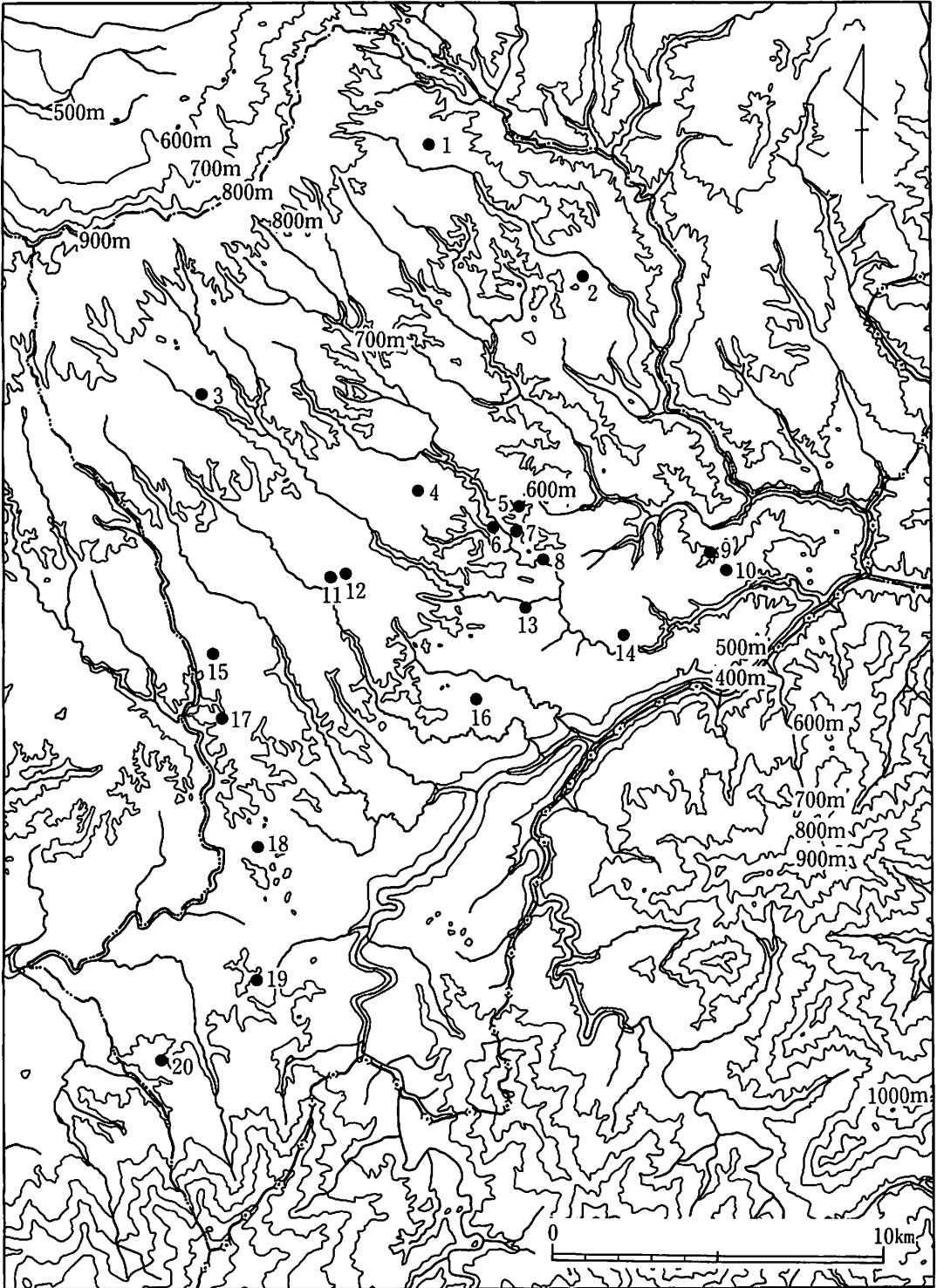
この地域にはその気象条件からして、噴煙影響の強い中央火口丘の火山荒原や湿地等の特殊環境を除いて、森林の展開が十分に考えられる。しかしながら、阿蘇地域の森林地帯としては、常緑広葉樹林の北向山、暖帯林から温帯林に移行する深葉国有林や菊池渓谷沿いの森林、温帯林である南外輪山内壁の狼ヶ宇土の国有林や根子岳等と数えるほどしかない。この地域を特色づける植生の中心は草原であり、主要な草本植物はススキ・カヤ・ネザサ等であるが、これは採草・野焼き・放牧等によって人為的に維持されているからである。

南郷谷から高森峠隧道を抜けて蘇陽町内に入ると、そこには牧草地と森林が浪海の様を呈している(図版1)。蘇陽町は阿蘇南外輪山山麓に位置し、地勢は北西に高く南東に低い。阿蘇南外輪山斜面に源流を求める諸小河川は阿蘇南麓の火砕流台地を開折しながら、東流して日向灘に注ぐ五ヶ瀬川と大矢川を介して、西流し有明海に注ぐ緑川にそれぞれ流れ込む。九州を縦貫する山地は雨水を東西に分ける分水嶺であるが、この町のほぼ中央を縦走する国道265号線縁辺

はこの一辺にあたる。蘇陽町の位置する上述の地理的環境から、河川交通が重きをなした時代において、この地方が果たしてきた重要な役割を容易に推想することができよう。またこのことを裏付けるかの如く、蘇陽町内から出土する考古学上の遺物からは、肥後・日向・豊後各地方の文化要素を窺うことができる⁽²⁾。現在、蘇陽町の過半を占める森林の樹種はマツ・スギ・クヌギが多い。前回の赤立遺跡の発掘調査では、クリ及びビカヤの炭化材が出土しており、クリに関して言えば南郷谷で出土した建築用材にも同樹種が見られ、当時この地方に多く繁茂していた樹種であると考えられている⁽³⁾。阿蘇外輪山は橄欖輝石安山岩と角閃輝石安山岩から構成される阿蘇熔岩噴出以前の火山体であり、その上を阿蘇火砕流に伴う噴出物が厚く堆積している。殊に、Aso-4火砕流による噴出物は阿蘇外輪山周辺が堆積の核となるが、遠く山口県の周防灘沿岸・伊万里市・天草島・島原半島・人吉盆地にも分布している。この火砕流堆積物は、軽石・石質破片・細粒物質が主要な構成要素であるが、その堆積直後に集中的な侵食を受けており、その結果蘇陽町には大小の河川が網密に広がっている。また、気候について述べれば、この地域は海拔標高500～700mの低温多雨気候であり、蘇陽町は水稻耕作に不適当な地理的・気候的

	遺 跡 名	時 代	所 在 地
1	猿丸遺跡	弥生	熊本県阿蘇郡蘇陽町大字柳字四辻
2	赤立遺跡	縄文・弥生	” 大字高畑字八ヶ迫
3	宇谷遺跡	縄文	” 大字大見口字宇谷
4	舞谷遺跡	縄文・弥生	” 大字玉目字舞谷
5	笹尾遺跡	縄文	” 大字二瀬本字笹尾
6	井野遺跡	縄文	” 大字二瀬本字井野
7	池ノ上遺跡	縄文	” 大字二瀬本字中尾
8	宮ノ下遺跡	縄文	” 大字二瀬本字宮ノ下
9	北平横穴墓	古墳	” 大字橋字北平1263
10	戸石平遺跡	縄文・弥生	” 大字橋字戸石平
11	五月遺跡	縄文	” 大字八木字五月
12	花立遺跡	縄文	” 大字八木字花立
13	茶屋元遺跡	縄文	” 大字柏字茶屋元
14	花寺遺跡	縄文・弥生	” 大字花上字柳迫
15	塩出遺跡	縄文・弥生	” 大字塩出字高原
16	高尾遺跡(今高塚遺跡)	縄文	” 大字今字高尾
17	牧野遺跡	縄文・弥生	” 大字塩出追字下牧野
18	打棒木遺跡	弥生	” 大字塩原字打棒木
19	宮ノ後遺跡	縄文・弥生・古墳	” 大字大野字宮ノ後
20	神ノ前遺跡	弥生	” 大字神ノ前字白石

第1表 蘇陽町内の縄文・弥生・古墳時代遺跡地名表



第1図 蘇陽町内の縄文・弥生・古墳時代遺跡分布図

条件にあると言える⁽⁴⁾。このような地理的条件は、上述の阿蘇外輪山周辺と変わるところはない。

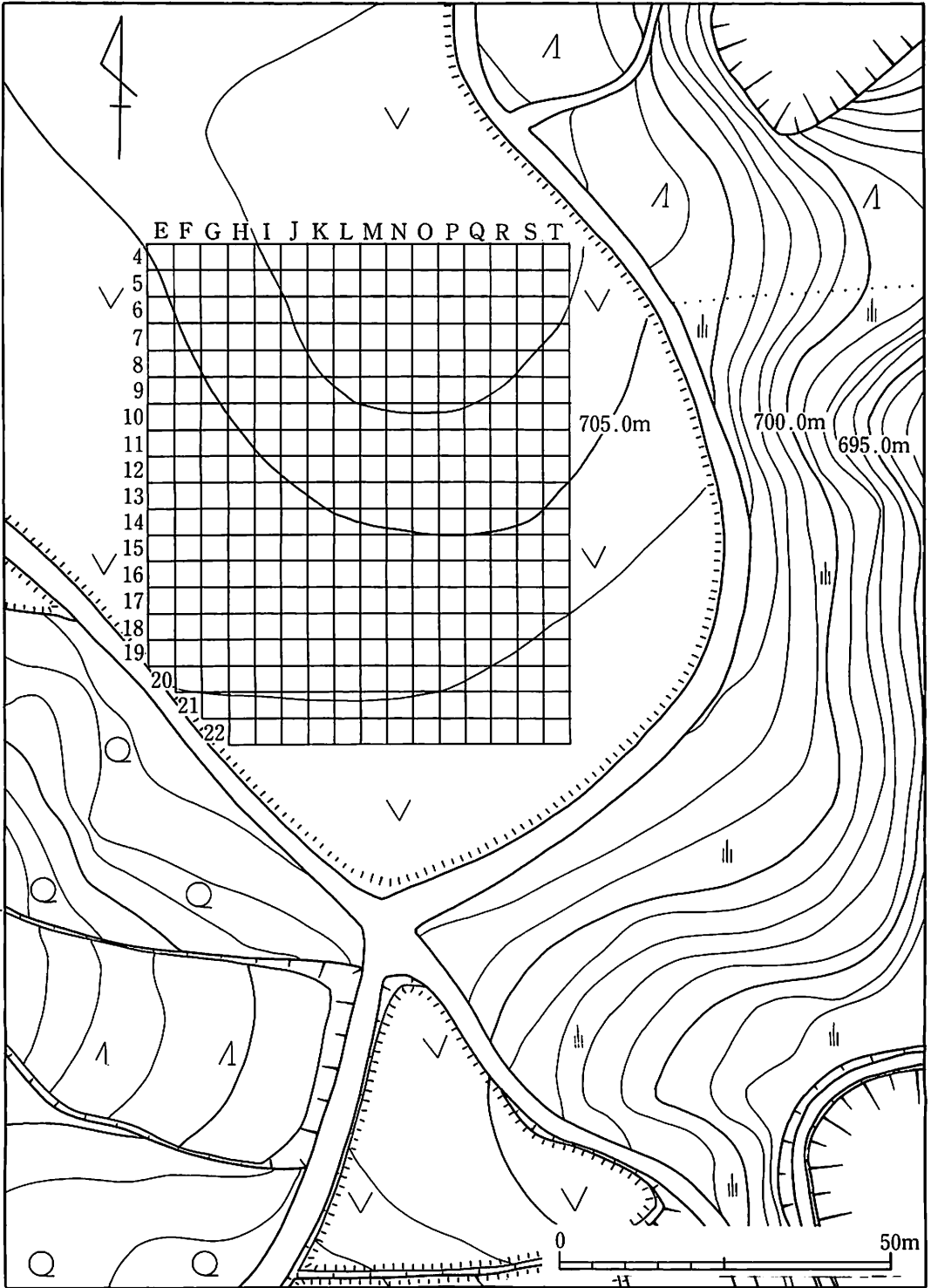
蘇陽町内では現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代の遺跡としては、赤立遺跡・宇谷遺跡・舞谷遺跡・笹尾遺跡・井野遺跡・池ノ上遺跡・宮ノ下遺跡・戸石平遺跡・五月遺跡・花立遺跡・茶屋元遺跡・花寺遺跡・塩出遺跡・高尾遺跡・牧野遺跡・宮ノ後遺跡の16遺跡が挙げられる。この内、今高塚遺跡では、石錐・削器・黒曜石製の石鏃・押型文土器・条痕文土器等が出土した。土器は手向山式と塞ノ神式の範疇に属すると考えられ、このことから当遺跡は縄文時代早期に比定される⁽⁵⁾。また、この両者の土器型式は鹿児島県の遺跡を標識とするが、このことは当時の当該地域が他の地域から決して隔絶された地域ではなかったことを物語っている。弥生時代の遺跡としては、猿丸遺跡・赤立遺跡・舞谷遺跡・戸石平遺跡・花寺遺跡・塩出遺跡・牧野遺跡・打棒木遺跡・宮ノ後遺跡・神ノ前遺跡の10遺跡を列挙することができる。上記のことから判るように、赤立遺跡・舞谷遺跡・戸石平遺跡・花寺遺跡・塩出遺跡・牧野遺跡・宮ノ後遺跡の7遺跡からは縄文・弥生両時代の遺物が出土、もしくは表面採集されており、このことは、縄文・弥生の両時代を通じて集落が同一地点に立地するという特徴を顕示している⁽⁶⁾。次に、町内の古墳時代の遺跡として北平横穴墓及び宮ノ後遺跡が挙げられる。北平横穴墓は赤立遺跡と同時に発掘調査が行われたが、遺物皆無のため時期特定は不可能である。蘇陽町内でこれまでに発掘調査が行われた縄文・弥生・古墳時代の遺跡は、赤立遺跡・北平横穴墓・花寺遺跡・今高塚遺跡・宮ノ後遺跡の5遺跡であり、これら以外の諸遺跡の詳細は今のところ不明である。

赤立遺跡は蘇陽町北東部、標高705m程の開析された火砕流台地の平坦面に営まれている。この台地の南側にも同様の台地が連続する以外は、西側は緩やかな、また北側・東側は急峻な側刻によって周辺の台地から隔絶されている(図版1)。ここからは北西に阿蘇南外輪山やその内奥に屹立する根子岳・高岳、北東には祖母山・古祖母山、南には隣接する宮崎県の高峰を眺覧できる。遺跡経営の際の選地理由の一つに、上述の地理的条件を挙げることができよう。

(松浦一之介)

註

- (1) 阿蘇町教育委員会『陣内遺跡』、1982年。
- (2) 甲元眞之「海と山と里の文化」『えとのす』22号、1983年。
- (3) 蘇陽町教育委員会『高畑赤立遺跡発掘調査報告書』、1988年。
- (4) 熊本日々新聞社『熊本県大百科事典』、1982年。
- (5) 蘇陽町教育委員会『今高塚遺跡発掘調査報告書』、1990年。
- (6) 山下志保「熊本県阿蘇郡蘇陽町椎屋戸石平遺跡—中九州山岳地域の弥生時代をめぐって」『九州考古学』第67号、1992年。



第 2 图 赤立遺跡周辺地形測量図

二 調査の概要

1. 目的と経過

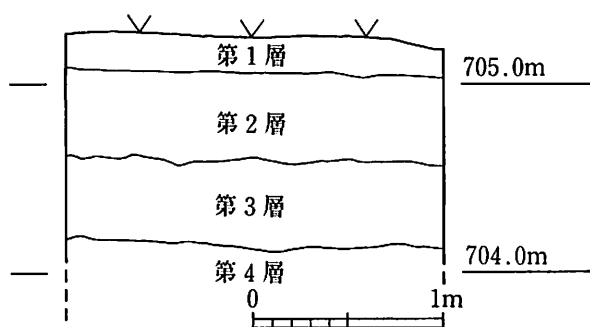
高畑赤立遺跡の第一次発掘調査は、1987年に蘇陽町教育委員会により行われた⁽¹⁾。この調査で、畑の表面に確認された黒色土の拡がりの下から弥生時代後期の竪穴住居址（2号住居址）1基が検出された。また、畑の表面には他に4ヶ所の黒色土の拡がり確認でき、その周辺から数多くの弥生時代後期の土器片や石器が採集された。以上から、当遺跡は該期に営まれた住居址群と考えられた。弥生時代の土器・石器以外に、縄文時代の土器片および石鏃・磨製石斧・石匙などの石器も第一次調査時に出土した。

今回の発掘は、遺跡の範囲確認と集落の性格を明らかにすることを目的とし、熊本大学文学部考古学研究室により1994年8月20日から9月3日にかけて実施された。

調査の手順は、まず南北軸を基準として調査対象地域内に4×4mのグリッドを設定し、北から南に1・2・3・・・、西から東にA・B・C・・・と命名した(第4図)。次に、黒色土が表面に拡がっている地点にグリッドに沿って2m幅のトレンチを入れ、厚さ20cm程の耕作土(第1層)を除去し、黒褐色シルト層(第2層)の上面において遺構の位置を確定した。この第2層の上面を遺構検出面として拡張し、1・3・4・5号の4基の住居址を検出、完掘した。また、前回の調査で中央広場と見られていた地点より、6号住居址を検出した。その他、遺跡の範囲を確認するため、3号住居址の北側に南北方向の第1トレンチ(長さ20m、幅1m)を、1・6号住居址の西側には北から第3(長さ8m、幅1m)、第2(長さ27m、幅1m)、第4(長さ8m、幅1m)の東西方向のトレンチを設定した。このうち、第2・3・4トレンチでは住居址と思われる遺構を検出したが、今回は時間の都合により、遺構の確認にとどまった。なお、第4図中の2号住居址は、第一次調査時に発掘されたものである。

2. 基本層序

L-13グリッド北東隅に2×2mの深掘区を設定し、基本層序を確認した(第3図)。これによると、第1層は暗褐色シルト層(Hue7.5YR3/4)である。厚さ20cm程で、粘性はなく、しまりは弱い。耕作土であり、第2層の土がブロック状になって混入している。第2層は厚さ40~50cmの褐色シルト層(Hue7.5YR4/3)である。これは、アカホヤ火山灰層で、粘性はややあり、しまりもある。この層の上部までトレンチャーが入っており、一部攪乱を受けている。この層の上面が遺構検出面である。第3層は黒色シルト層

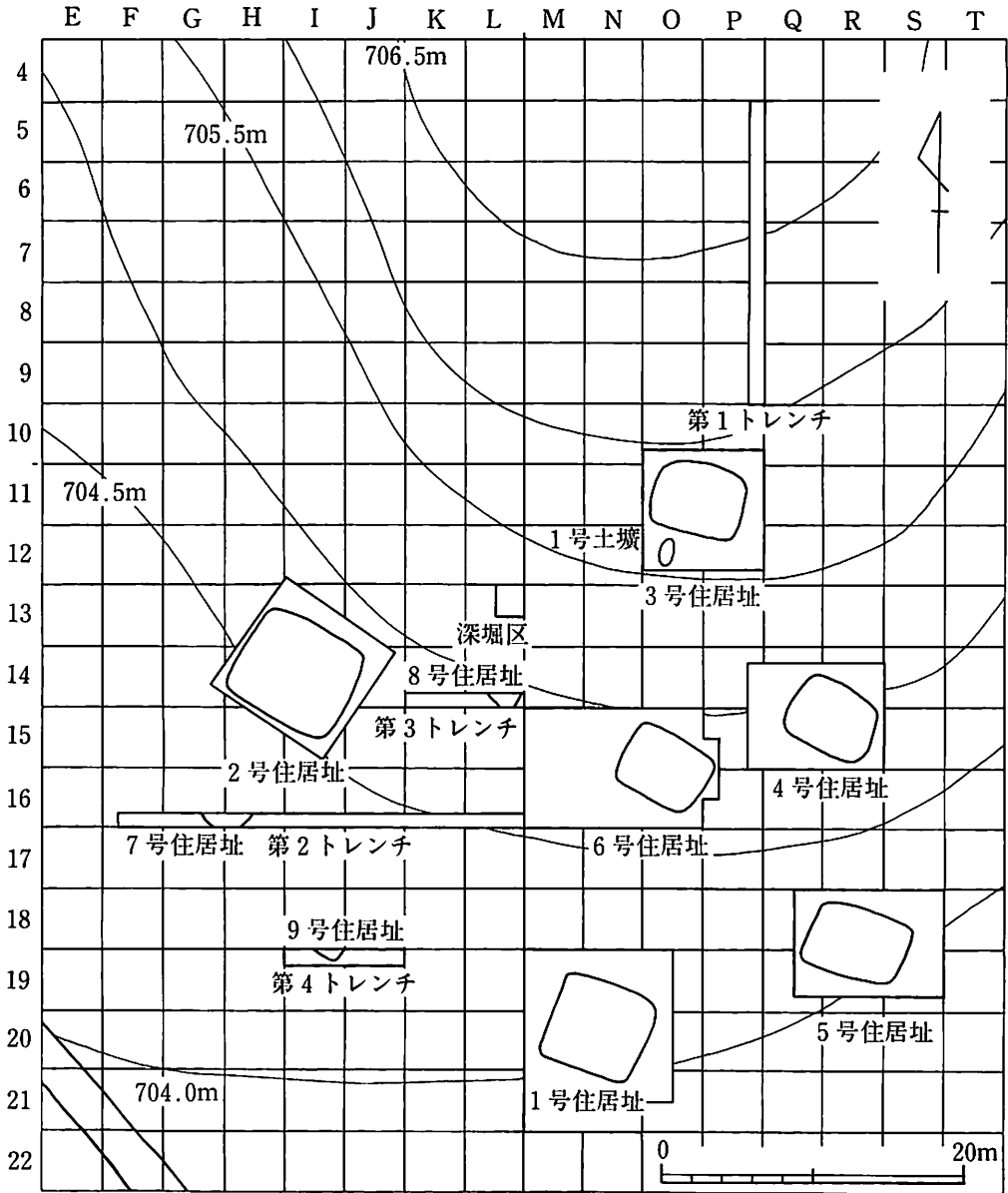


第3図 基本層序(深掘区東壁)

(Hue5YR1.7/1)で、厚さは50cm程、粘性は強く、しまりもある。縄文時代早期の遺物包含層の可能性はあるが、遺物は出土しなかった。第4層は黒褐色シルト層(Hue10YR2/3)で、粘性が強い。第3層よりも固くしまっている。(松里健一)

註

(1) 蘇陽町教育委員会「高畑赤立遺跡発掘調査報告書」、1988年。



第4図 遺構配置図

三 検出遺構および出土遺物

今回の調査で検出できた遺構は住居址9軒、土塋4基である。これらのうち今回の調査では住居址5軒(1、3、4、5、6号住居址)と土塋1基(1号土塋)を完掘した。住居址の埋土は基本的に5軒とも同じ堆積状況を示していたが、ここでは最も遺存状況の良好であった4号住居址の断面図に代表させて土層の記述を行った。以下に発掘した遺構および出土遺物の記述を行う。

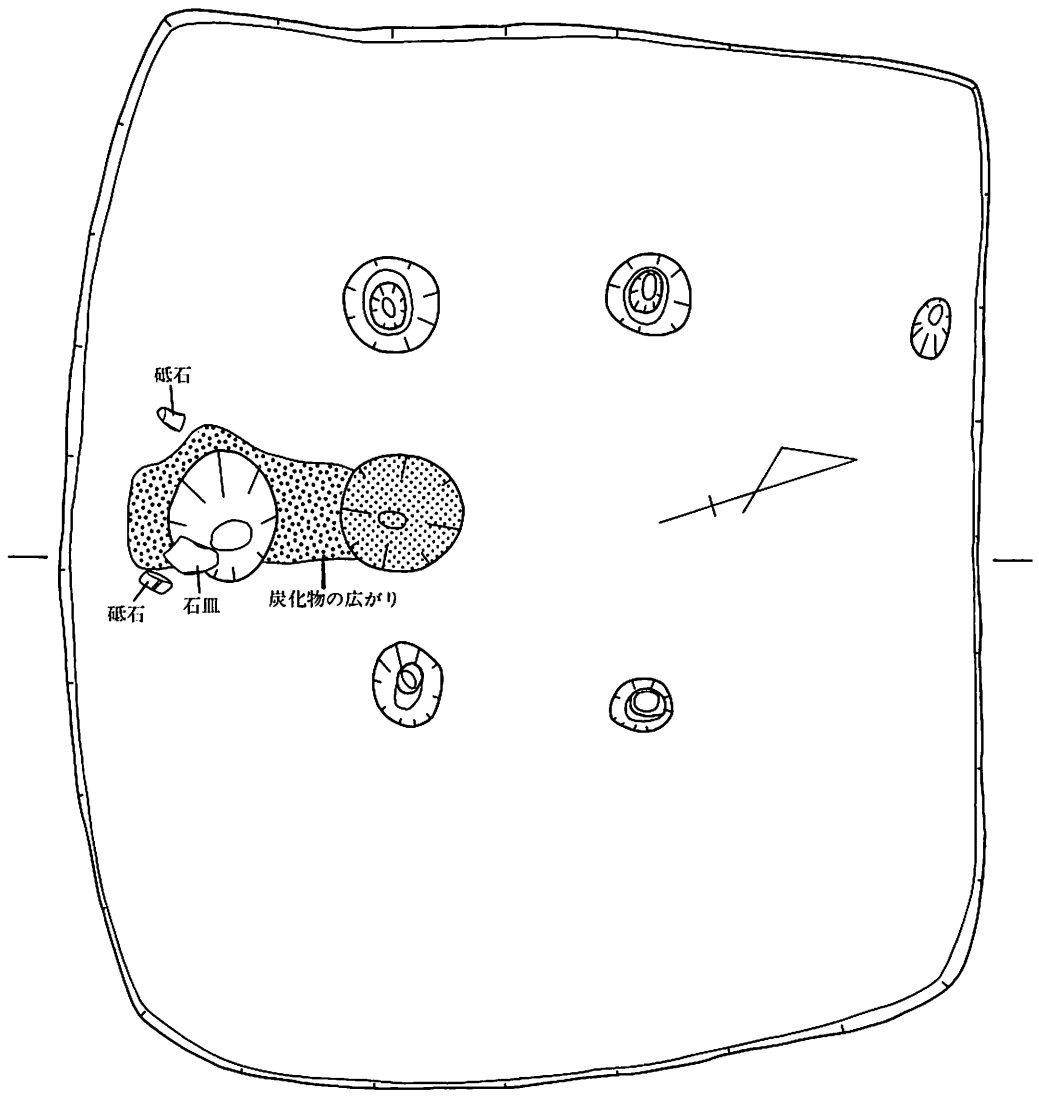
1. 1号住居址(第5・6図、図版2)

位置 本住居址は、M-19・20、N-19・20・21、O-19・20グリッドから検出され、今回調査した住居址群の中では最も南に位置する。

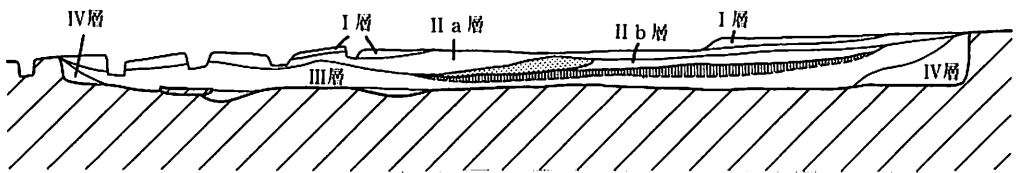
埋土 埋土は、I層(黒色土層)、II a層(褐色土層)、II b層(褐色土層)、III層(暗褐色土層)、IV層(黄褐色土層)の5層に分層できる。埋土と住居址の周堤部の一部は、耕作による削平によって消失しており、特に南側が激しい。I層は、ほとんどが消失し部分的に堆積している。II層中には焼土の広がりがある。焼土を介して、上をII a層、接するものをII b層に分層した。焼土中から長さ25cm、幅7cmの炭化材が出土した。この炭化材は又木であったが、建築材として使用したかは不明である。焼土はII b層を掘り込んだ形で形成されており、II b層の上面で二次的な利用が行われたと考えられる。III層は床面の直上の流れ込みの層である。III層の上に炭化物の広がりがある。IV層は床面直上の土とほぼ同質のものであることから、住居址の壁が流れ込んだものと考えられる。



遺物出土状況 遺物はI層から土器片、II a層から土器片、II b層から土器片・磨製石鏃・砥石、III層から土器片・石器剥片・打製石鏃・鉄片、IV層から土器片、床面直上から土器片・磨製石鏃・砥石・石皿・鉄片が出土している。石皿は南側のピットに埋まっている状態で出土した。砥石は石皿の南側に1点、西側に1点出土した。磨製石鏃は南側のピットの埋土の上面から出土した。鉄片は南側のピットの側から出土した。甕の口縁部は南壁側から出土している。

構造 主軸方位は北々東-南々西である。長軸は6.9m、短軸は6.0mで平面形は長方形である。床面積は約41.4㎡である。壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がり、壁の残存の高さは南壁のみ16cmで、他の壁は約30cmである。柱穴は中央付近に4つ検出した。柱穴の配置は長辺2.6m、短辺1.2mの長方形をなす。炉は住居址の中央やや南よりに位置する。直径60cmの円形の掘り込みがあり、深さは20cmである。炉内の埋土は遺構埋没時の埋土と炭化物・焼土を多く含み、炉を使用していたときの埋土の2層に分層できる。ピットは2つ検出された。1つは炉から40cm南に位置し、長径60cm、短径50cmの楕円形を呈し、深さが10cmである。このピットと炉の付近の床面には炭化物が広がっていた。このピット内の埋土は炉の埋土や周囲の炭化物の広がりと比較して炭化物の混入率が低いことから、炉の灰を捨てた穴とは考えにくく、その性格は不明である。もう1つは北壁から20cm内側に位置し、長径40cm、短径20cm、深さ20cmである。このピットの性格は不明である。焼土を形成した二次利用面は攪乱が激しく、遺構・遺物の確認は



標高704.4m



 焼土
 炭化物

0 2m

第5図 1号住居址実測図

できなかった。

出土遺物 土器は甕が多く出土し、壺はほとんどみられなかった。第6図-1は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。石英・長石を含む胎土で、焼成は良好である。器面は橙色を呈する。口縁部がくの字形に折れ開き、頸部内面に明瞭な稜を有する。内外器面ともハケ調整を行い、その後口縁部から頸部にかけてヨコナデを施している。外器面胴部と内器面頸部付近にスガが付着している。2は免田式の壺の肩部と考えられる。石英・長石を含む胎土で、焼成は不良である。器面は褐色を呈する。内器面・外器面にヨコナデを施した後、外器面に数本の沈線を横方向に施している。3は甕の脚台である。石英・角閃石・長石・黒雲母を含む胎土で、焼成は良好である。器面は浅黄色を呈する。端部が角張る裾部は外反し、内部に砂型を有し、ヨコナデを施した後、ヘラケズリを施している。外器面はヨコナデを施しており、ヘラ状工具によって脚と胴部を接合した痕跡がみられる。

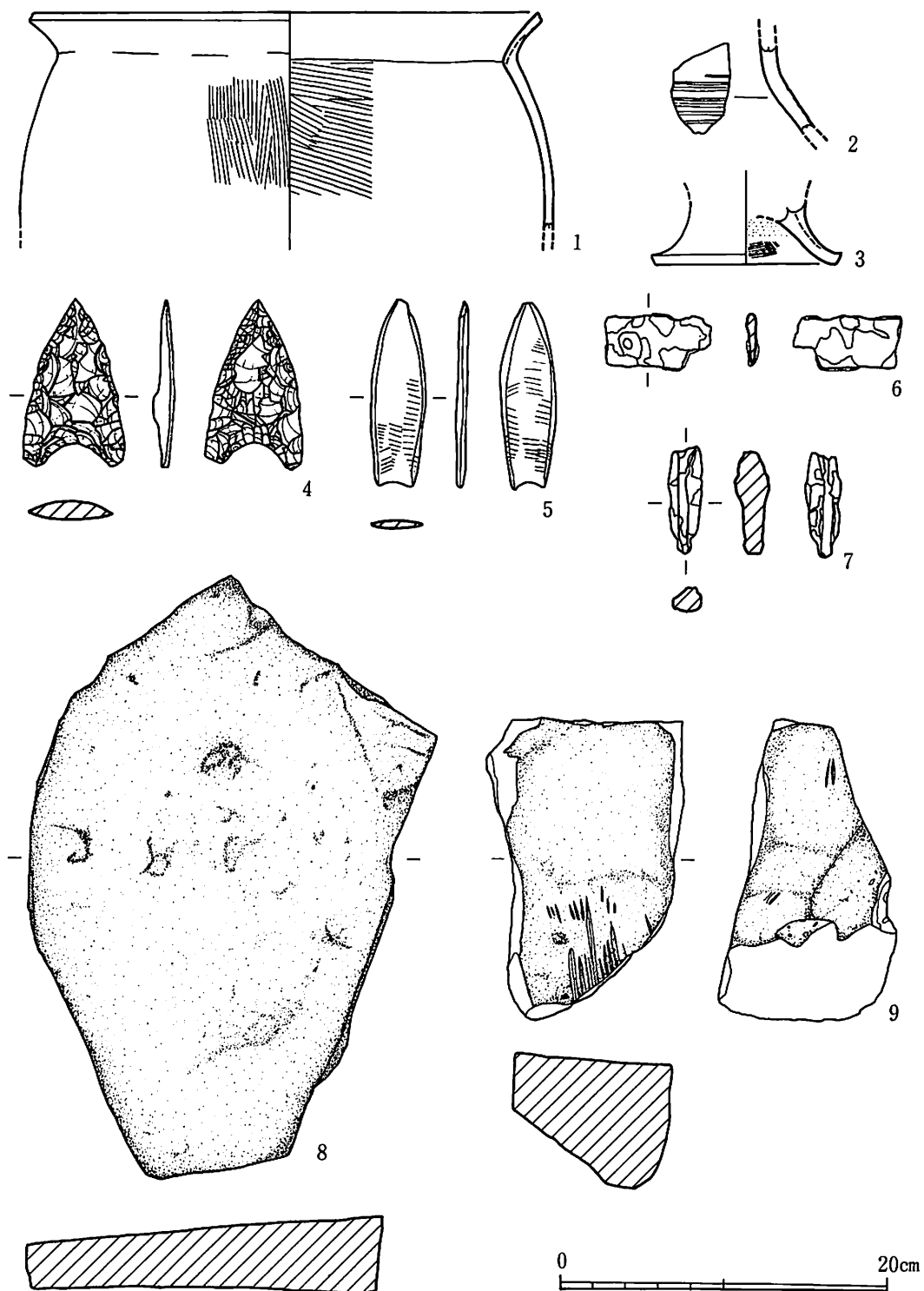
石器は、剥片・打製石鏃・磨製石鏃・磨製石鏃の未製品・砥石・石皿が出土した。4はチャート製の打製石鏃の完形品である。形状は凹基無茎式で、平面形態は二等辺三角形形状である。重量は0.9gである。両側縁部に打撃を加え、基部に抉りをいれている。5は輝緑凝灰岩製の磨製石鏃で、先端部を一部欠損している。形状は凹基無茎式で、平面形態は柳葉形状である。重量は4.1gである。全面をきれいに磨研している。側縁部は先端部から基部まで鋭い稜をなす。8は角閃石安山岩製の石皿である。全面を被熱して黒ずんでおり、特に右側が激しい。9は砂岩製の砥石である。3面を使用しており、うち2面を主に使用している。使用面は平滑になっており、一部に刃の研ぎ跡がある。使用面や刃の研ぎ跡には鉄サビが付着している。同じ砂岩製の砥石が他に床面から1点、II b層から1点出土している。

鉄器は1号住居址のみで3点出土した。6は刀子である。先端部・基部を欠損している。刃部片面に錨を有する。7は刺突具の一部と考えられる。1枚の鉄片を木材に挟んでおり、側縁部の木材は丸く加工されている。サビが全面に付着しており、鉄片を挟んでいる木材は腐食して空洞になっている。他の一点は用途不明である。

時期 1号住居址は床面直上から出土した甕(第6図-1)から弥生時代後期前葉に属すると考えられる。(古屋俊英)

層位	I層	II a層		II b層	III層	IV層	床面直上	柱穴内埋土
土器 第6図				2・3			1	
石器 第6図							5・8・9	4
鉄器 第6図					6		7	

第2表 1号住居址出土遺物実測図一覽表



第6图 1号住居址出土遗物实测图

2. 3号住居址（第7・8図、図版3）

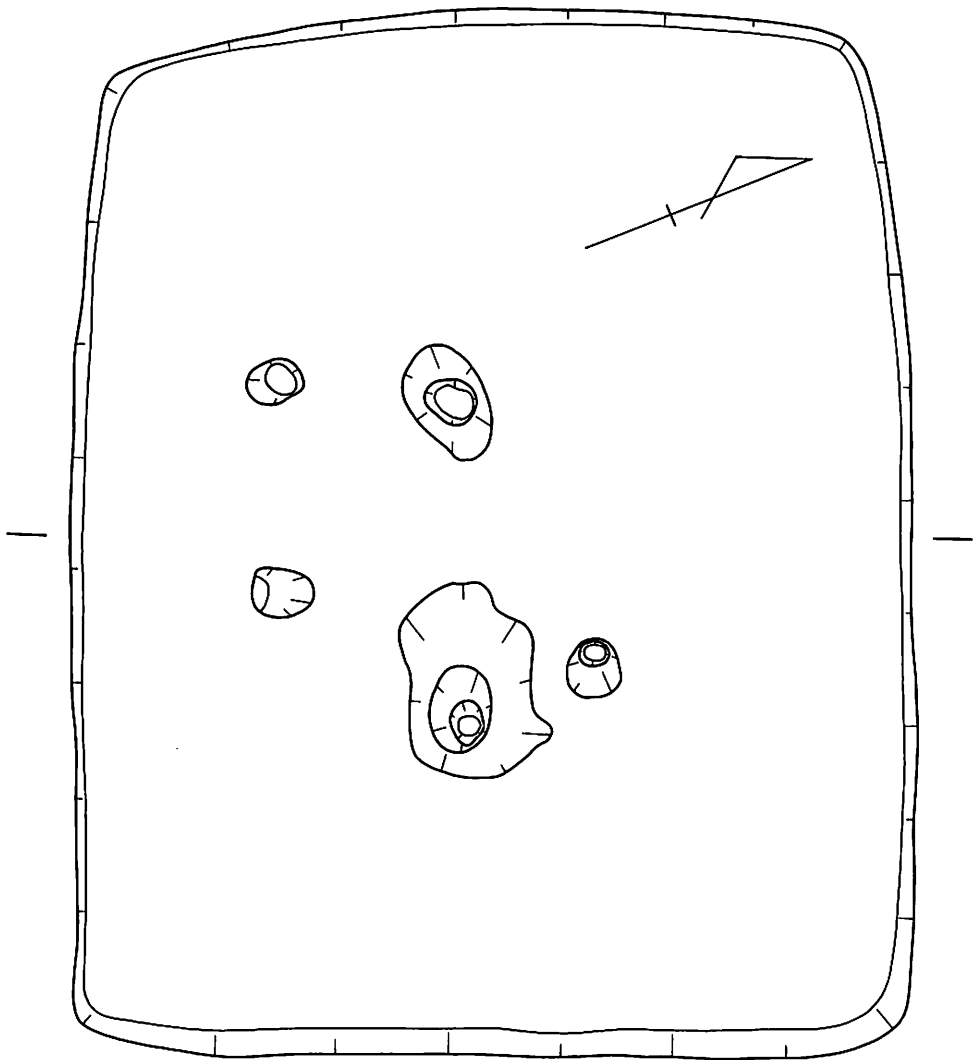
位置 本住居址は、O-10・11・12、P-10・11・12グリッドから検出され、今回調査した住居址群の中で最も北に位置する。

埋土 埋土は、I層（黒色土層）、II層（褐色土層）、III層（暗褐色土層）、IV層（黄褐色土層）の4層に区分できる。他の住居址の埋土よりも1つの層の堆積が薄い。II層上面に接した壺（第8図-7）の上部（口縁部から胴部にかけて）が、I層と上の耕作土（第1層）との境界線できれいに切られており、これより上部はトレンチャーによる攪乱を受けているものと考えられる。II層上面の壺は、胴部中程以上の部分が割れて一ヶ所に重なって出土し、最大のもので1.5cm角程度の炭化物が土器周辺に認められた。

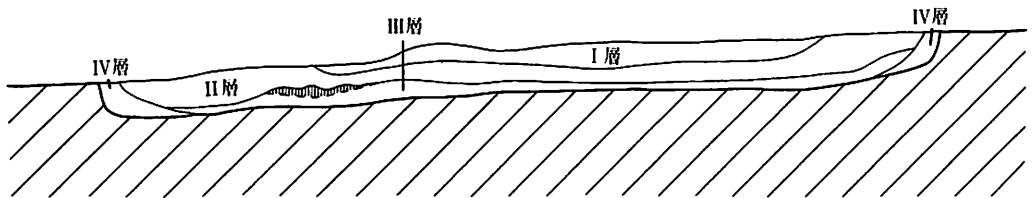
遺物出土状況 遺物は床面直上からはほとんど出土しておらず、柱穴の中から土器片が2点出土した。II層上面からは壺、II層中からは石庖丁や紡錘車、土器片が出土している。紡錘車は住居址の南東地区の比較的壁寄りの地点で傾いた状態で出土した。III層上面からはほぼ完形の壺、砥石、石皿の破片、軽石などが出土している。砥石は、1個体が2つに割れており、片方だけ火を受けていた。このことから砥石が廃棄されてからIII層上面で火が焚かれたと考えられる。これらはIII層上面の礫の集中分布の中から出土し、壺はIII層上面に底部を付け、土圧で細かく砕けて重なりあった状態で出土している。

構造 主軸方位は北北東-南南西で、長軸は5.3m、短軸は4.3mである。平面形は長方形を呈する。住居址の床面積は約23㎡である。III層下に炭化物とアカホヤなどが混入したしまりのある硬化面が検出されたので、これを床面と認定した。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面には柱穴が5個確認できた。これらの柱穴は、住居址の中心方向にわずかに傾斜している。炉は確認できなかった。III層上面には遺物や炭化物が集中している。最大のもので幅7cm、長さ28cmの炭化材が多量に出土し、周辺の土は炭化物によって黒色になっている。この付近から径約8~20cmの礫が8個、5cm以下の小礫が3個、円形に並んで出土した。これらは、住居址の南東から南西側にかけての半径1m程の円形の範囲から出土しており、周辺には部分的に焼土がみられることから、この範囲は炉のように使用され、この面は生活面であったと考えられる。

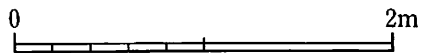
出土遺物 土器は、壺と甕の2種類が出土した。第8図-3はIII層上面に底部がついた状態で出土した壺の完形品である。口縁部が大きく外反し、頸部に突帯を1条巡らす。胴部は中程が最もよく張り、そこに刻目突帯を1条巡らす。底部は、面を有する丸底である。大きさの割りに器壁は薄い。口縁部は、ハケ目調整の後時計回りにナデ調整を施している。その他、底部を除くほぼ全面に、斜めあるいは縦方向に間隔の違うハケ目調整を施している。外器面も内器面も、主に2種類のハケ調整を施している。それぞれ異なった目の粗いハケ状工具で一次調整した後、二次調整で共通の1本の細かいハケを加えたそれぞれ2本のハケ調整を施している。調整の工具の種類は全部で3種類と考えられ、内器面には部分的に3種類の工具の調整が見られる。胎土は黒雲母・石英・長石などを多く含みやや粗く、焼成は良好で、器面にはふい黄橙色を呈す。4は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。口唇部に1条の凹みが入る。口縁



標高706.0m



炭化物



第7图 3号住居址实测图

部には、内器面、外器面ともにハケ調整を施したあと、ナデ調整を施している。胴部の外器面はハケ調整がみられる。長石や雲母を含むきめ細かい胎土で、焼成は良好、器面は浅横橙色を呈する。5は頸部下に断面三角形の突帯を2条有する甕の破片である。内外器面ともにナデ調整を施している。胎土は粗く、雲母・長石などを含み、焼成は良好で、外器面は明赤褐色、内器面はにぶい褐色を呈する。6は甕の脚部の破片である。内器面には先端の幅0.9cm程度のヘラ状工具でなでるような調整がみられ、方向は一定ではない。その上からハケ調整を施し、方向は左下から右上である。内器面の砂型には1～3mmの砂つぶが混入しており、非常に粗い。外器面の上部に炭化物が付着している。胎土はきめが細かく、焼成は良好で器面はにぶい黄橙色を呈す。7はII層上面より出土した口縁部より胴部中程まで残存する壺である。口縁部が大きく外反し、口唇部は角張っている。頸部に断面三角形の突帯を1条巡らす。内外器面ともに間隔の狭いハケ調整を行った後、ナデ調整を施している。特に口縁部や内器面は強いナデ調整でハケ目の残りが悪い。胎土は雲母・長石などを含み粗く、焼成は良好で、器面は浅黄橙色を呈す。外器面の胴部にススの付着が認められる。

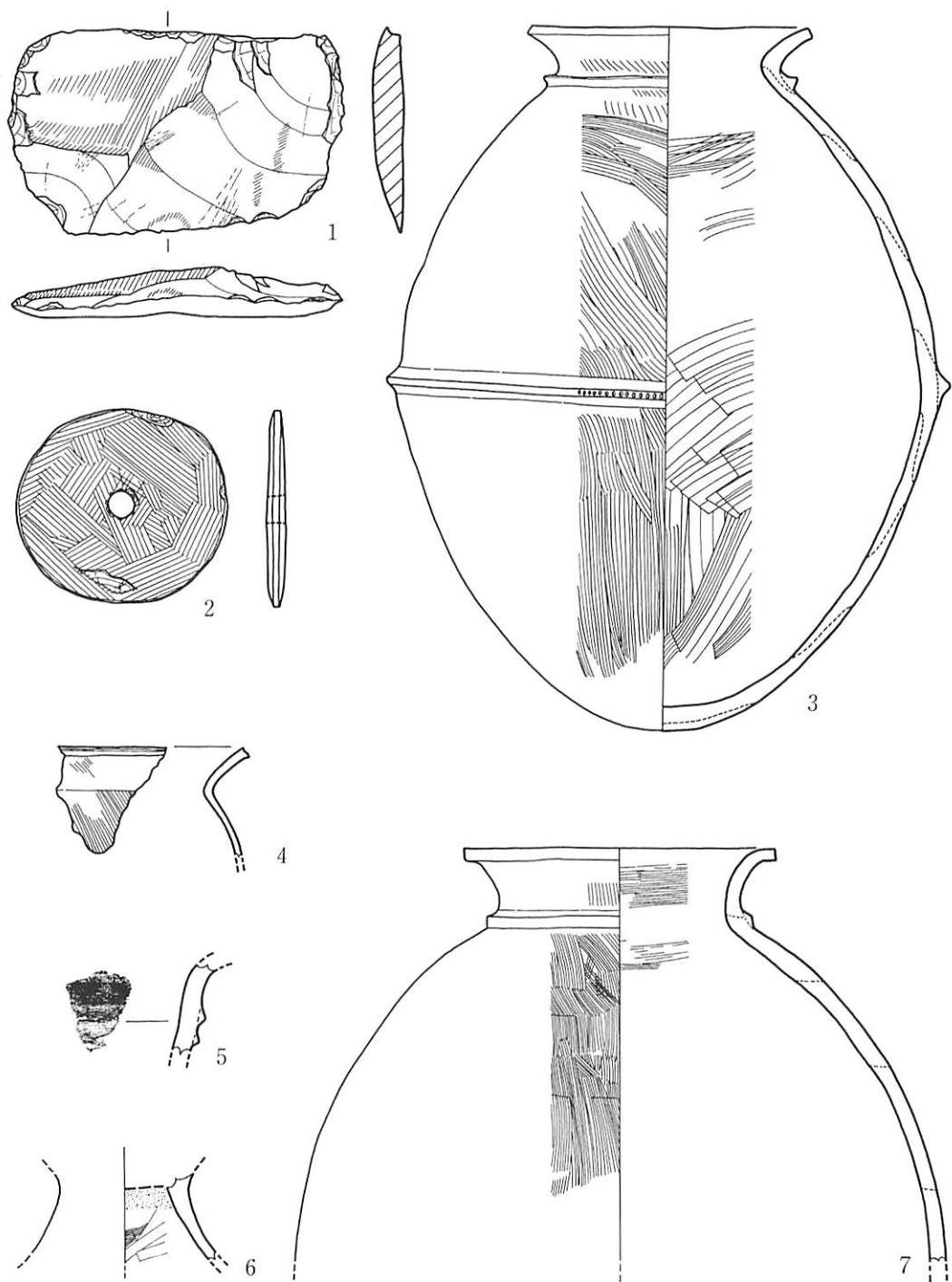
石器は、1が珪質片岩製の石庖丁未製品である。剝離面を半分以上残しており、部分的になめらかに研磨されている。周囲は加撃による整形をしている。2は珪質片岩製の磨製紡錘車の完形品である。ほぼ真円で、厚みは5mmと薄手である。重量は26gである。孔の周囲の剝離は、使用痕か孔を穿ける際の剝離か不明瞭である。整形後、全面をよく研磨しているが、分的に磨き残しがある。円周部は小間隔で研磨の方向が変わり、全体的に時計回り方向に順次研磨されている。

時期 柱穴内の出土遺物および他の住居址との構造の比較から、この住居址は弥生後期前葉の時期に属すると思われる。また、III層上面の利用面は出土した土器から同じく弥生時代後期前葉に属すると考えられ、この住居址が再利用されたのは廃棄後からそれほど時間が経過していない時期であったと思われる。

(相川奈美)

層位	I層	II層上面	II層	III層上面	III層	床面直上	柱穴内埋土
土器 第8図	5	6・7		3			4
石器 第8図			1・2				

第3表 3号住居址出土遺物実測図一覧表



第 8 图 3 号住居址出土遗物实测图

3. 4号住居址（第9・10図、図版4）

位置 本住居址は、遺構配置図のQ-14、15及び、R-14、15グリッドから検出された。

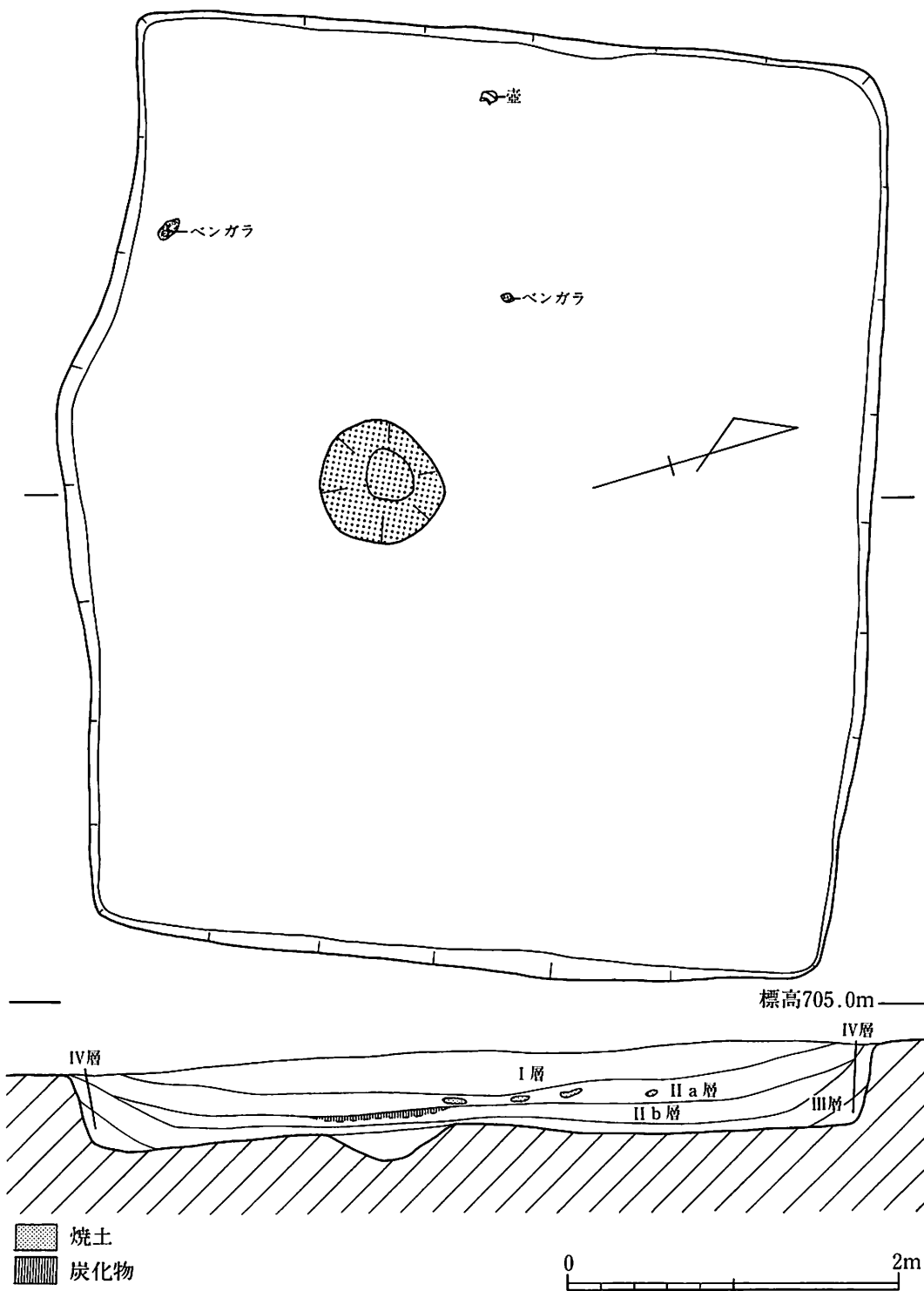
埋土 埋土の堆積は、4層に区分され、各層の詳細は以下のとおりである。

- I層 黒色土層(Hue2.5YR2/1)。かなりしまりやや粘性がある。土壌化しており、この下位の褐色土層に浸蝕している。
- II層 褐色土層(Hue10YR4/4)。粒子が細かく、しまっており、粘性はややある。層状の炭化物を境にII a層とII b層に分けた。
- III層 暗褐色土層(Hue10YR3/4)。粒子は細かいが、粘性はあまりなく、ややしまっている。
- IV層 黄褐色土層(Hue10YR5/8)。粘性はややあり、しまっている。粒子は細かく、かつ混入物を含まない純粋な層である。

I層とII層の間に住居址の中心からやや東にしっかりとした焼土面が東西約1 m×南北約1.6mの範囲で広がっていた。また、それに伴って細かい炭化物、土器片、石器の剥片が出土している。II層とIII層の間にも焼土が中心よりやや東よりに広がっており、その焼土に伴って炭化したほぞ穴のついた角材と板材が出土している。この角材は、ほぞ穴部分をほぼ真南に向けて出土し、すぐ側には、残存時の長さ約50cm、幅約10cm、厚さが約1～2 cmの板材があった。このほかにも中心西側にも角材と思われる炭化物が数点出土している。これらは、上屋構造の一部であったと考えられる。以上のことから、I層とII層の間、II層とIII層の間は、住居址の再利用時の生活面と考える。このほか、II層の間に炭化物の広がりを中心から東側にかけて確認され、この炭化物を境にII a層とII b層に分けた。この炭化層は、それに伴う焼土や遺物がないことから流れ込みと考えられる。

遺物出土状況 遺物は、I層から磨製石鏃の未製品が2点、破損した磨製石鏃1点、使用痕のある剥片が2点、破損した後に熱を受けた石皿の破片が1点出土し、そのほか壺や甕の口縁部や底部にあたる土器片のほか石器の剥片が多数出土している。遺物の量では、このI層が最も多い。II層からは、土器では縄文時代中期の深鉢形土器の胴部、弥生時代後期の小型壺の胴部、甕の脚部各1点、甕の口縁部が3点、胴部が数点、そのほか壺の胴部やその他、土器片が多数出土しており、石器では完形の打製石鏃が1点と破損した石鏃片が2点、石鏃の未製品が1点、さらに破損した石皿片が3点と軽石が1点出土した。III層からは、土器は縄文時代晩期の深鉢形土器の口縁部、甕の脚部が各1点とその他数点の土器片が出土し、石器は打製石鏃が2点、破損した後に熱を受けた砥石が1点、そのほか剥片が数点出土している。床面直上からは、住居址西壁近くの半完形の壺、不整形のスクレイパー、甕の脚部が各1点ずつ出土している。また、床面直上ではベンガラ塊が2ヶ所認められた。

構造 主軸方向は北西-南東で、大きさは長軸が5.7m、短軸が4.9mで、平面形は長方形を呈し、床面積は約27.9㎡となる。床面はほぼ平坦で、壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は検出できなかった。炉は住居址の中心からやや南に位置し、径約0.8mの不整形円形である。深さは0.2mで、その中には粒子の細かい黒色土が堆積しており、遺物は出土していない。



第9図 4号住居址実測図

出土遺物 第10図-12は深鉢形土器の胴部である。外器面全面には節の荒い単節斜縄文 RL が施してあり、内器面には縦方向、横方向にハケ調整がなされている。胎土には雲母片を含んでおり、焼成はやや不良で黒色を呈する。縄文の施文方法から見て、縄文時代中期の竹崎式に比定できる。11は深鉢形土器の口縁部で、口縁部はほぼ直立する。外器面、内器面ともに貝殻条痕文が認められる。内器面ではさらにナデ調整が施されている。胎土には石英を含んでおり、焼成はやや不良で黄淡色を呈する。縄文時代晩期の黒川式に比定できる。9・10は甕の口縁部である。両者とも「く」の字に外反する。外器面、内器面ともに横方向にナデ調整が施されている。また、頸部から胴部にかけてはハケ調整がなされている。両者とも胎土に石英、長石、雲母片を含む。焼成は両者とも良好で、9は明褐色を呈し、10は暗褐色を呈する。13は壺の胴部で、外器面、内器面ともにハケ調整がなされている。胎土に石英、長石を含み、焼成は良好である。器面は暗赤色を呈する。17は甕の脚台である。裾の端部は丸みを帯び、内器面の上部には砂型を有する。外器面、内器面ともに横方向にナデ調整がなされている。胎土には石英、長石を含み、焼成は良好で黄橙色を呈する。16は壺の胴部である。外器面の肩部は縦方向にハケ調整が施されており、内器面は横方向にナデ調整が施されている。胎土には石英、長石を含み、焼成は良好で、色調は淡黄色を呈する。15は半完形の壺である。口縁部は外反し、頸部内面には明らかな稜線を有する。胴部中程あたりで「く」の字に屈曲し、平底の底部に続く。肩部の外器面にはへら状工具によるナデ調整が施され、口縁部はナデ調整が施されている。内器面は横方向にナデ調整がなされている。胎土に石英、長石を含み、焼成はやや不良で、淡黄色を呈する。胴部中程より下の部分でススの付着が見られる。

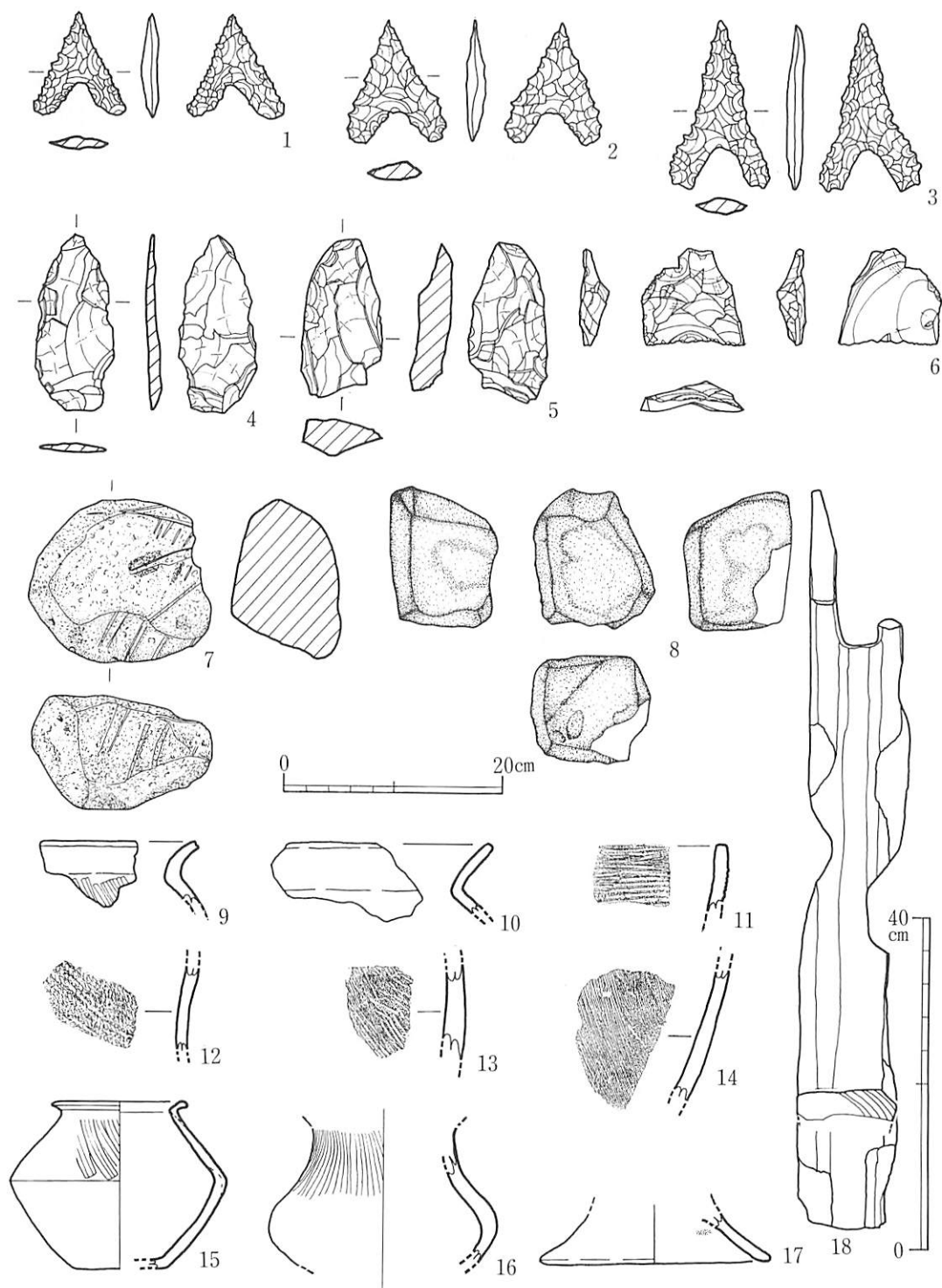
1・2・3はチャート製の凹基式無茎の打製石鏃である。形状は、1・3は二等辺三角形を呈し、2は正三角形を呈する。重量は、1は0.6g、2は0.4g、3は0.3gである。すべて、交互の押圧剝離によって整形がなされている。4・5はチャート製の磨製石鏃の未成品である。両端から打撃を加え整形している。重量は4は5.3g、5は13.4gである。4はほぼ整形が終了したものである。6はチャート製の不整形のスクレイパーである。重量は6.2gである。7は軽石で、平坦な面に使用された時にできたと思われる3本の溝の跡が認められる。重量は101gである。8は安山岩製の磨石の破片で、全面に使用痕が認められる。破損した後に熱を受けた部分が認められる。18は炭化した建築材である。ほぞ穴と思われる部分に手斧痕と思われる扁平な切口が残存している。残存した木目方向から、芯持ちの柱材であった可能性が高い。

時期 住居址の時期はすべての生活面とも、弥生時代後期前葉に属すると思われる。

(山口健剛)

層位	I層	II層	III層上面	III層	IV層	床面直上
土器 第10図		9・10・12・13・14・16・17		11		15
石器 第10図	4・5	2・7・8		1・3		6
炭化材 第10図			18			

第4表 4号住居址出土遺物実測図一覧表



第10图 4号住居址出土遗物实测图

4. 5号住居址 (第11・12・13図、図版5・6)

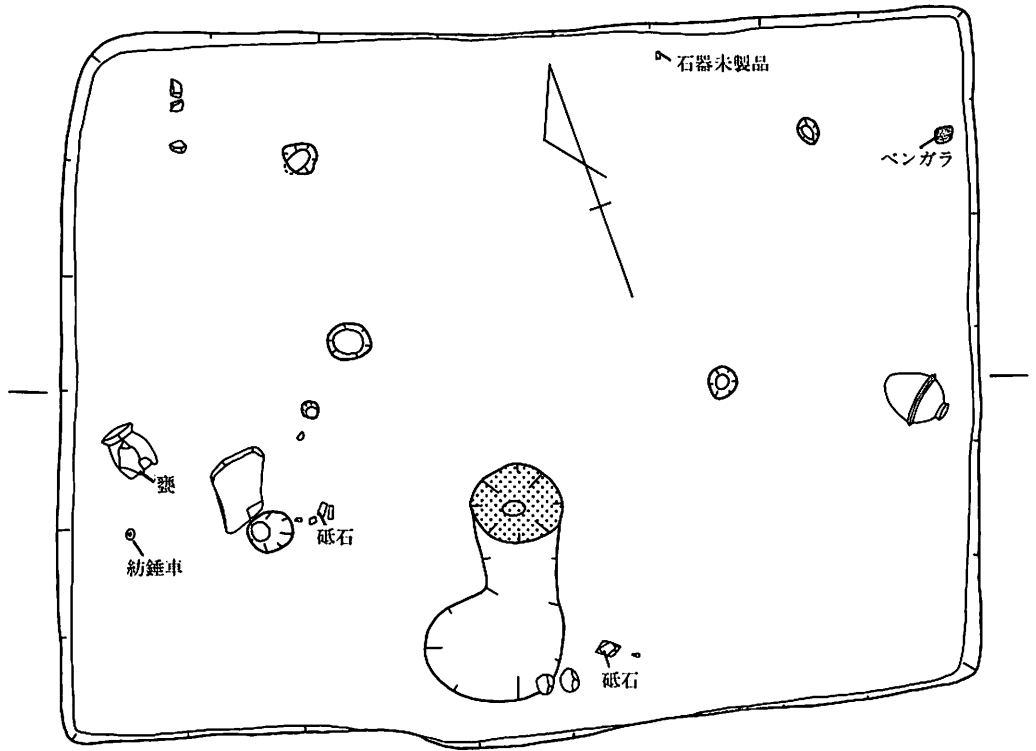
位置 本住居址は、Q-18・19、R-18・19、S-18・19グリッドから検出され、今回調査した住居址群のなかでは南東端に位置する。

埋土 埋土の堆積状況は他の住居址と同様であり、上から順にI層(黒色土層)、II層(褐色土層)、III層(暗褐色土層)、IV層(黄褐色土層)が堆積している。II層とIII層の間から焼土が検出された。III層の堆積が行なわれる際に、住居址の中でも東の部分では完全に床面が埋没せずに凹みを生じ、そのためにIII層と床面上にわたって凸レンズ状に焼土が形成されたと考えられる。焼土は住居址中央より東側にのみ見られ、東西約2.3m、南北約2.4mの不整形に広がる。厚さは約10cmで、その上面、中より多量の炭化材が出土した。炭化材は長さ約50~60cm、幅約10cmであった。その大きさ、出土量の多さおよび厚い焼土の存在、この焼土の上面から多数の遺物が出土したことからみて、この焼土の上面は二次利用されており、炭化材はその時の上屋構造の一部と推定される。また、焼土の下には黒色の炭化粒の層が広がっているが、堆積の順番からみて焼土とは時間差があった可能性がある。

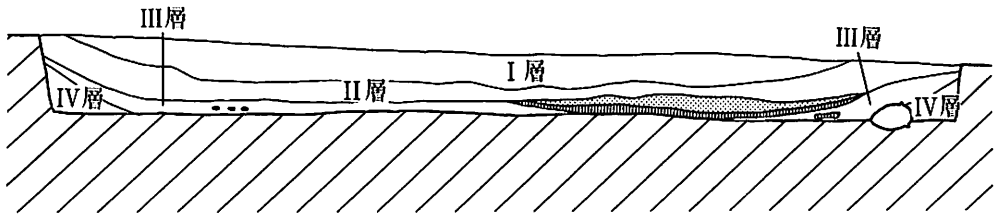
遺物出土状況 遺物は、床面直上からほぼ完形の甕(第12図-6)・壺(第12図-7)などの土器と、紡錘車(第13図-6)・砥石(第13図-7・8・9)・石皿(第13図-10)・磨石などの石器が出土している。その他にベンガラが、住居址北東の壁ぎわに径10cm程の円形にかたまった状態で出土した。I層からは小型壺の頸部・胴部片(第12図-4)・打製石鏃が、またII層からは鉢の口縁部片(第12図-3)・打製石鏃(第13図-4)が出土している。またII層の西端部、東西軸線上1m四方の範囲から、磨製石鏃の未製品と考えられるチャート製の石材(第13図-1・5)が多量に出土しているが、それぞれの石材のレベルにばらつきがあることから流れこんだものと考えられる。焼土上面からは甕の口縁部片(第12図-5)・脚部(第12図-9)・砥石が、III層からは磨製石鏃(第13図-3)・磨製石鏃未製品(第13図-2)が出土している。



構造 主軸方位は北北東-南南西で、長軸は5.9m、短軸は4.6mである。平面形は長方形を呈している。住居址の床面積は約27.4㎡である。床面はほぼ平坦に広がっている。壁はいずれの面もほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は東側で南北に並ぶように2つ、西側で南北に3つ並ぶよう配置されている。他に径が約20cm、深さが約10cmの円形の土壇があり、用途は不明である。炉は住居址の中央よりやや南よりに位置し、長径約60cm、短径約50cmの楕円形を呈し、深さは約15cmである。炉内には、炭化物を多量に含む黒色の埋土が堆積している。炉から南に1m程、炭で黒く汚れた浅い掘り込みが広がるが、これは炉内の灰をかき出していたためと考えられる。炉内からの遺物の出土はなかった。(高松幸一)

出土遺物 1は壺の頸部片である。外器面には貼付突帯が、その上部にはナデ調整が施されており、また下部には斜め方向の沈線の痕跡が認められる。内器面にはナデ調整が施されている。胎土は緻密で、石英片・長石片・雲母片を含み、焼成は良好で明赤褐色を呈する。2は壺の頸部片である。外器面には、貼付突帯が施されており、突帯の上部と下部にはナデ調整が施されている。内器面は欠けているため不明である。胎土は緻密で、石英片・長石片・雲母片を



標高704.5m



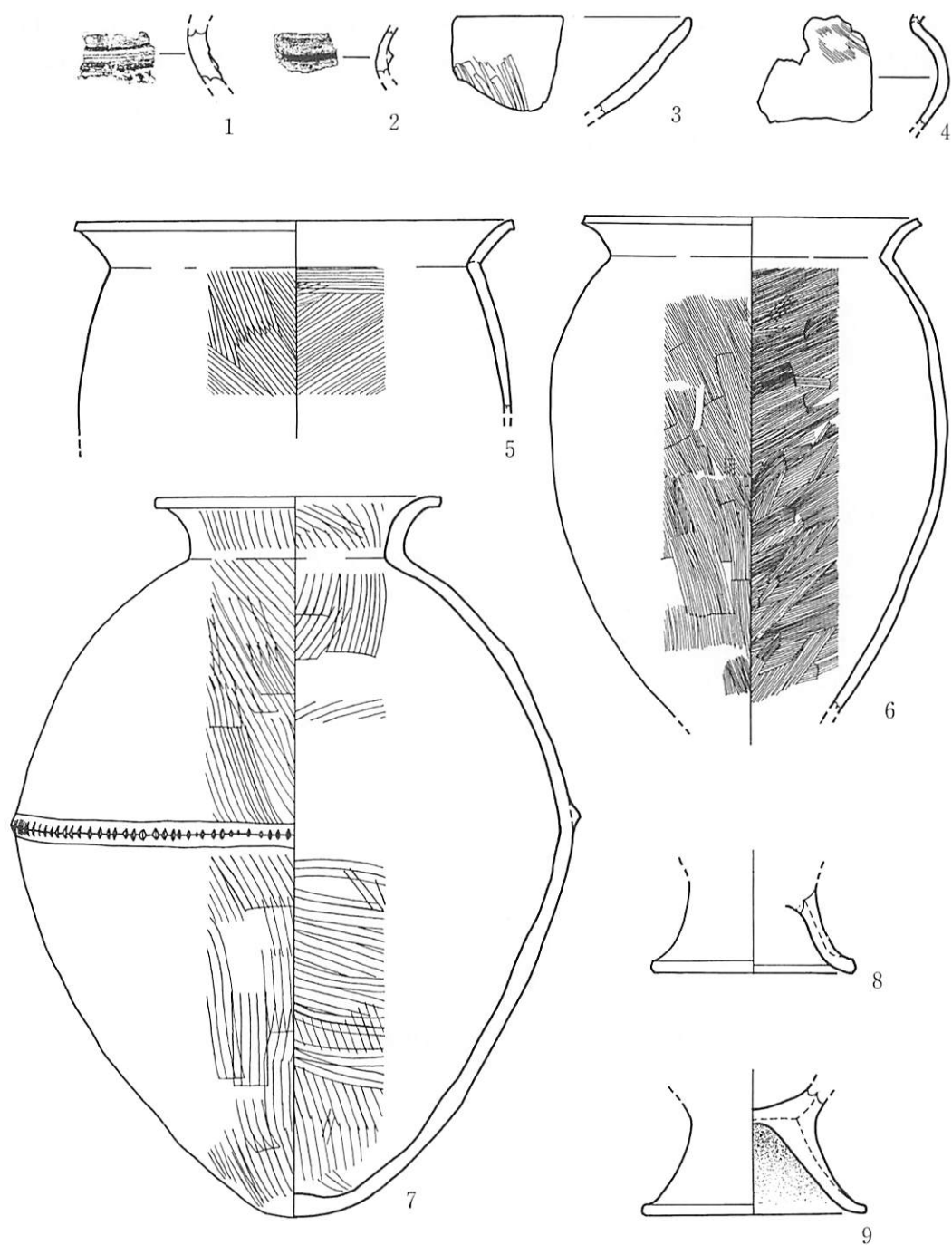
 焼土
 炭化物

0 2m

第11図 5号住居址実測図

含み、焼成は良好で明赤褐色を呈する。3は鉢の口縁部片である。外器面には、縦方向のヘラ削りが施されており、内器面には、横方向のハケ調整が施されている。内器面・外器面共に、口唇部から口縁部にかけてナデ調整が施されている。胎土は緻密で、石英片・長石片・雲母片を含み、焼成は良好で明褐色を呈する。4は小型壺の頸部から胴部にかけての破片である。外器面肩部にハケ調整を施した後、肩部から胴部にかけてナデ調整を施した痕跡が認められる。内器面には胴部に不整方向のハケ調整を施しており、頸部から肩部にかけてナデ調整を施している。胎土は緻密で、石英片・長石片・雲母片を含み、焼成は良好で明黄褐色を呈する。外器面胴部に二次焼成の痕が認められる。5は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部はゆるく外反し、外器面には、口唇部から頸部にかけてナデ調整が、胴部に斜め方向のハケ調整が施されている。内器面には、口縁部から頸部付近にかけて横方向の、また胴部には斜め方向のハケ調整が施されている。胎土は緻密で、石英片・長石片・雲母片を含み、焼成は良好で黄橙色を呈する。外器面及び内器面の一部にスガが付着する。6は底部を欠く甕である。口縁部はゆるく外反し、外器面には、口唇部から頸部にかけてナデ調整が、胴部に縦方向のハケ調整が施されている。内器面には、口縁部にナデ調整が施されている。胴部には、横及び斜め方向のハケ調整が施された後、部分的に指により磨消されている。胎土は緻密で、石英片・長石片・雲母片を含み、焼成は良好で明黄褐色を呈する。外器面にスガが付着する。7は完形の壺である。口縁部はゆるく外反し、胴部中央には刻目突帯が1条施されており底部は隆起する。外器面には、口縁部から胴部にかけて縦及び斜め方向のハケ調整が施された後、口縁部はナデ調整が施され、胴部下半はヘラ状工具によって一部磨消されている。内器面には、口縁部から底部にかけて縦、横及び斜め方向のハケ調整が施されている。口唇部には沈線が施されている。中央の突帯の刻目は8~10mm間隔の施文である。突帯貼付後、上・下部をナデている。胎土は緻密で、石英片・長石片・雲母片を含み、焼成は良好で明黄褐色を呈する。外器面にスガが付着する。8は甕の脚部片である。外・内器面共にナデ調整が施されている。胎土は緻密で、石英片・長石片・雲母片を含み、焼成は良好で明黄褐色を呈する。9は甕の脚部片である。外器面にはナデ調整が施されており、内器面には砂型が認められる。脚底部にヘラ状工具でナデた痕跡がある。胎土は緻密で、石英片・長石片・雲母片を含み、焼成は良好で明黄褐色を呈する。また断面より、砂型に粘土を置き胴部下部の粘土を載せ、その継ぎ目に粘土を貼り付ける製作工程を窺うことができる。脚部内器面に被熱痕が認められる。 (松浦一之介)

石器は、剥片・打製石鏃・磨製石鏃・磨製石鏃未製品・石器未製品・紡錘車・砥石・磨石・石皿が出土した。1・5はチャート製の磨製石鏃未製品である。荒削りによって形を整えた後、周囲に細部調整を施している。また研磨を施す以前の状態で、全面に剝離痕が残っている。また5には一部原礫面が残っている。重量は1が4.2g、5が14.0gである。2は黒色頁岩製の磨製石鏃未製品である。加撃によって形を整えた後、全面にわたってほぼ水平方向に研磨を施しているが、一部磨き残しによる剝離痕が残っている。重量は6.5gである。3は黒色頁岩製の磨製石鏃の完形品である。形状は凹基無茎式で、平面形態は二等辺三角形を呈する。重量は1.3gで



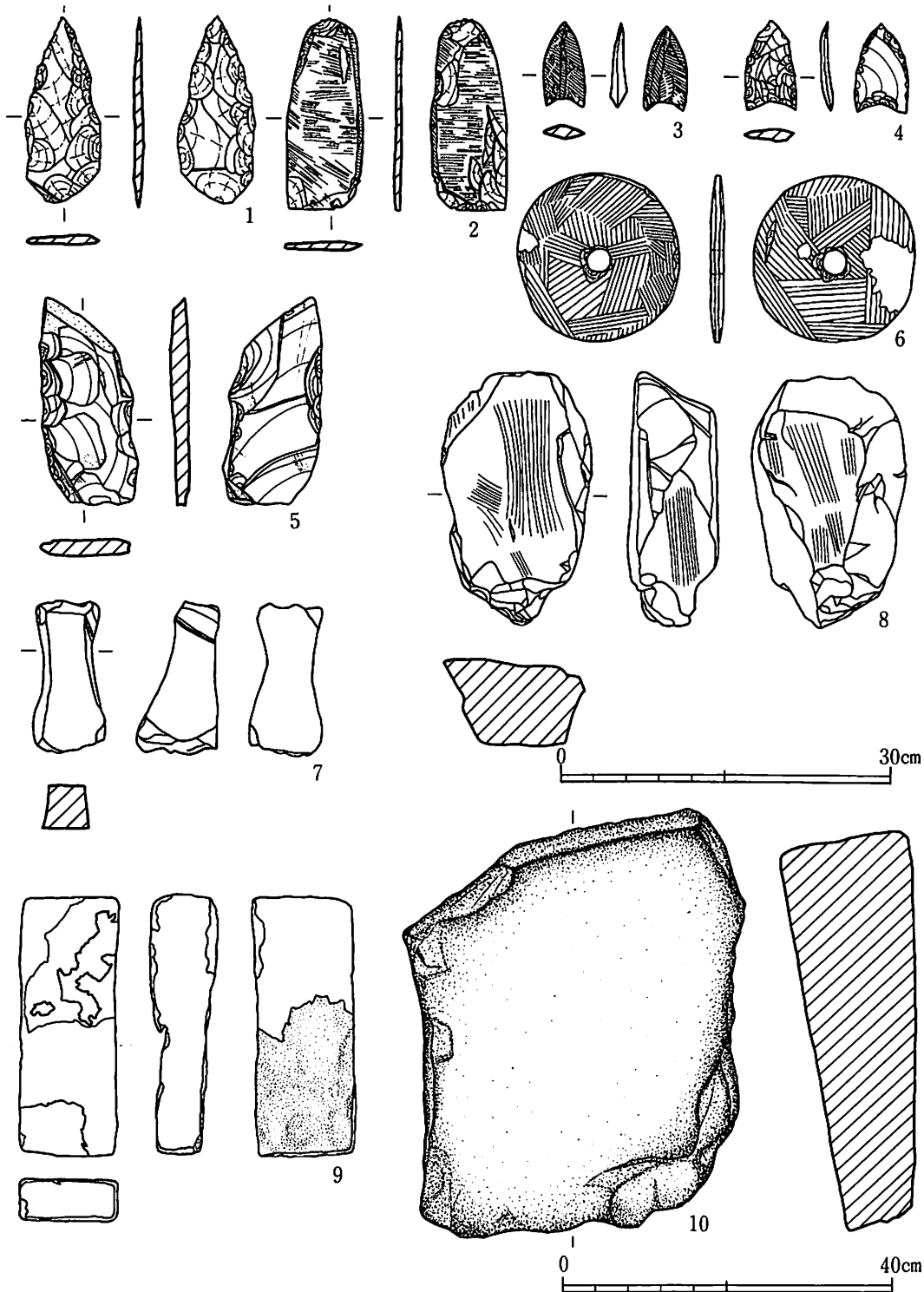
第12图 5号住居址出土遗物实测图(1)

ある。全面にわたって左上から右下の方向へと研磨を施している。挟りの部分にも研磨を施している。側縁部は先端部から基部まで鋭い稜をなすが、一部に刃こぼれが見られる。4は珪質砂岩製の打製石鏃の完形品である。形状は凹基無茎式で、平面形態は二等辺三角形を呈する。重量は2gである。周囲に押圧剥離を施して調整を行ない、基部に浅い挟りをいれている。6は珪質片岩製の磨製の紡錘車の完形品である。形状はほぼ円形を呈しており、重量は17.5gである。円形に調整の後、両面ともに研磨を施しているが、かなりの磨き残しがある。研磨は時計回りに円を描くように施されている。孔は片側穿孔である。孔の周囲には穿孔時の剥離が見られる。7は熔結凝灰岩製の砥石である。方柱状に成形した後、4つの面を使用している。使用面は内側に湾曲しており、非常に滑らかである。擦痕は見られない。重量は23.7gである。8は砂質頁岩製の砥石である。採取した石材の形体をそのまま利用したと考えられる。3つの面を使用しており、その面は非常に滑らかである。一番広い面がもっとも使用された面と考えられ、わずかにくぼんでいる。使用面には擦痕が残っており、その方向はほぼ面の長辺にそって平行であるが、もっとも広い面では一部斜め方向に使用されている。9は輝緑凝灰岩製の砥石である。形状は、一部表面が剥離しているが、ほぼ直方体を呈する。原礫面を1面残して成形した後、5つの面を使用している。使用面はすべて滑らかであり、擦痕が残っているが、その方向はまちまちである。重量は71.0gである。10は安山岩製の石皿である。採取した石材の平らな面をそのまま利用したと考えられる。上下両面が使用面であるが、両面ともそれほど磨滅しておらず、短期間しか使用されなかったと考えられる。

時期 住居址の時期は、床面直上の土器から弥生時代後期と考えられる。また、焼土の見られる使用面は出土した土器から同じく弥生時代後期と考えられ、それほど時期をおかずに、二次的な利用が行われたと考えられる。 (高松幸一)

層位	I層	II層	焼土上面	III層	IV層	床面直上
土器 第12図	4・8	2・3	5・9	1		6・7
石器 第13図		1・2・5		3・4		6・7・8・9・10

第5表 5号住居址出土遺物実測図一覧表



第13图 5号住居址出土遗物实测图(2)

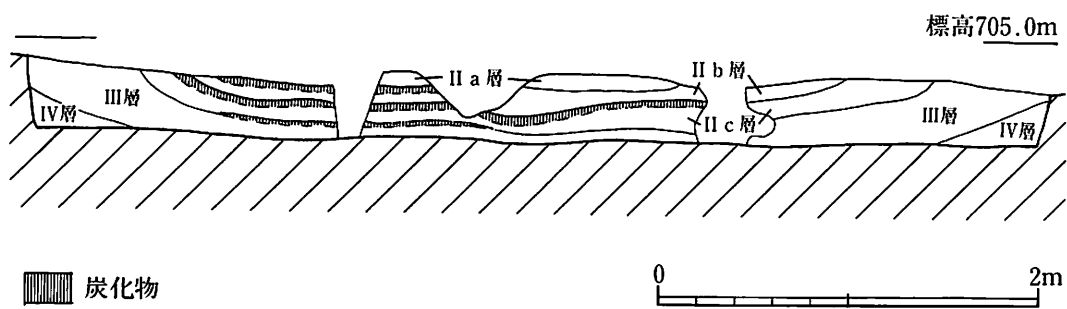
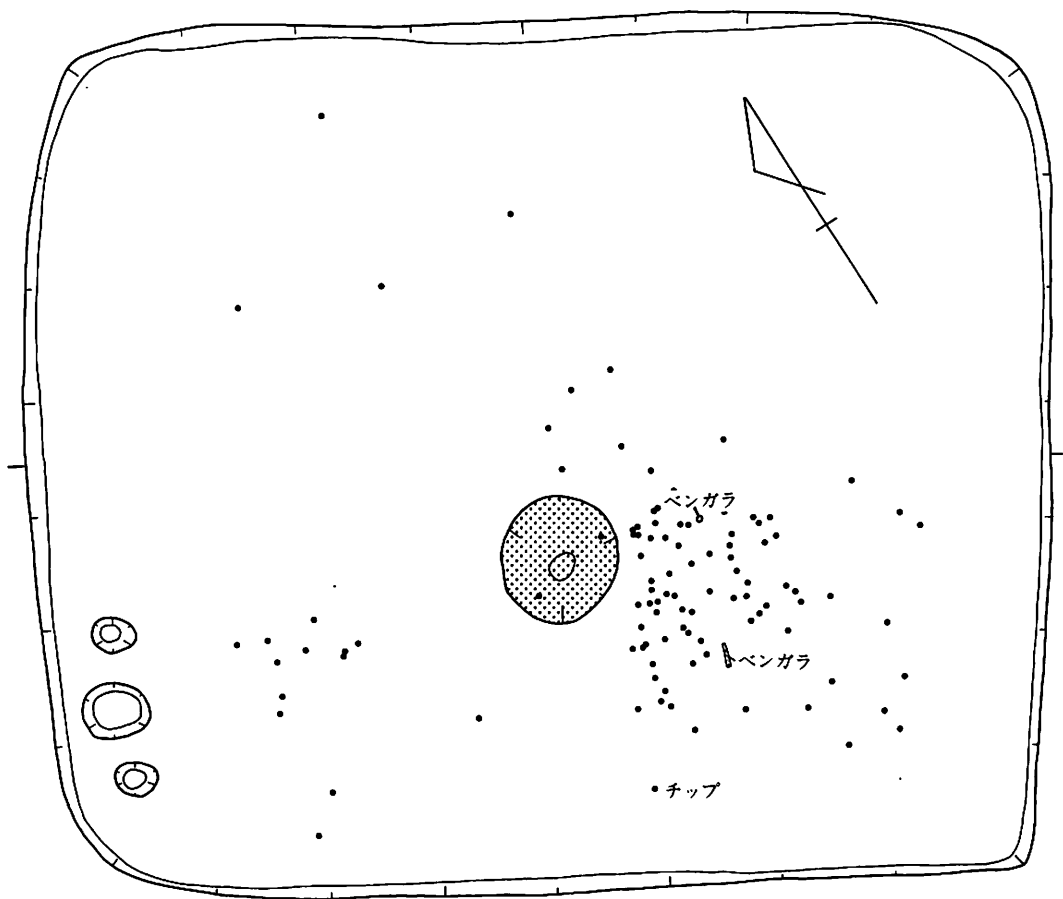
5. 6号住居址（第14・15・16図、図版7）

位置 本住居址は、N-15・16、O-15・16、P-15・16グリッドから検出された。

埋土 埋土は、I層（黒色土層）、II層（褐色土層）、III層（暗褐色土層）、IV層（黄褐色土層）の4層に区分できる。I層はトレンチャーによる攪乱によりほとんど削平を受けている。II層中より2層、II層とIII層の間から1層の炭化物層が確認されたことから、II層を炭化物層を挟んでII a層、II b層、II c層の3層に分層し、炭化物層を上からII b層上面、II c層上面、III層上面とした。これらの炭化物層は直下の層に伴うものと思われる。尚、II b層上面は、住居址内において上部西側に位置し、両端は攪乱によって切られている。平面的な広がりを持つものではない。II c層上面はほぼII c層と同じ範囲で分布しており、両端は攪乱によって切られているものの、広範囲に面的な広がりを見せる。完形の甕（第15図-5）が出土している。III層上面は住居址内において下部西側に分布している。面的な広がりを持つものである。これらの炭化物層に伴う遺物の出土は少なく、焼土等の形成も見られないことから一時的に利用された二次的利用面であると思われる。III層は床面直上に堆積している層であり、混入物は少ない。IV層は住居址隅に三角堆積している層である。

遺物出土状況 床面直上からは、チャートの破片がまとまった形で106点出土している。住居址中央から南西方向にかけて分布している炉の中の埋土と同質の土中から出土しているものであり、それに伴って長さ5 cm×幅1 cm、および1 cm程度の大きさのベンガラ塊が計2点出土している。これらは原位置からの出土と見られ、住居址内において偏在していることから、住居址内において石器製作が行われた位置を示しているものと思われる。これらの出土位置については平面図中にドットで図示している。しかしながら、石器製作に伴うものと思われるものの、チャートの破片の他に石器製作に伴う遺物は出土しなかった。その他に床面からは、軽石及び土器片が1点出土している。埋土中からは、土器片や石器等が多数出土している。埋土中から出土した主な遺物は、II a層から磨製石斧（第16図-10）、甕の脚台。II b層から石庖丁（第16図-6）、磨製石鏃（第16図-4）、焼礫、甕の脚台。II c層から磨製石鏃未製品（第16図-3）、打製石鏃（第16図-9）、磨研土器の口縁部。III層から使用面のある軽石、焼礫、複合口縁壺（第15図-3）。IV層からはチャート製の石核、磨製石鏃および磨製石鏃未製品（第16図-1・2）等が出土している。IV層から土器は、出土していない。炭化物層については、II b層上面からチャートのチップ、脚台、土器片。II c層上面から甕（第15図-5）。III層上面から土器片等が出土している。

構造 トレンチャーにより住居址の上層が攪乱を受けているため、正確な規模については不明であるが、平面形は長方形であり、主軸方位は西北西-東南東である。長軸の長さは5.3m、短軸の長さは4.6m、床面積は約19.6㎡である。III層下より、炭化物とアカホヤなどが混入したしまりのある硬化面が検出されたので、これを床面と認定した。壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は住居址の中央部やや南側から検出された。規模は直径約60cm、深さ約30cmである。炉の中および床面の南東方向にかけて、暗褐色の炭化物を多く含む土が堆積している。住居址の西側



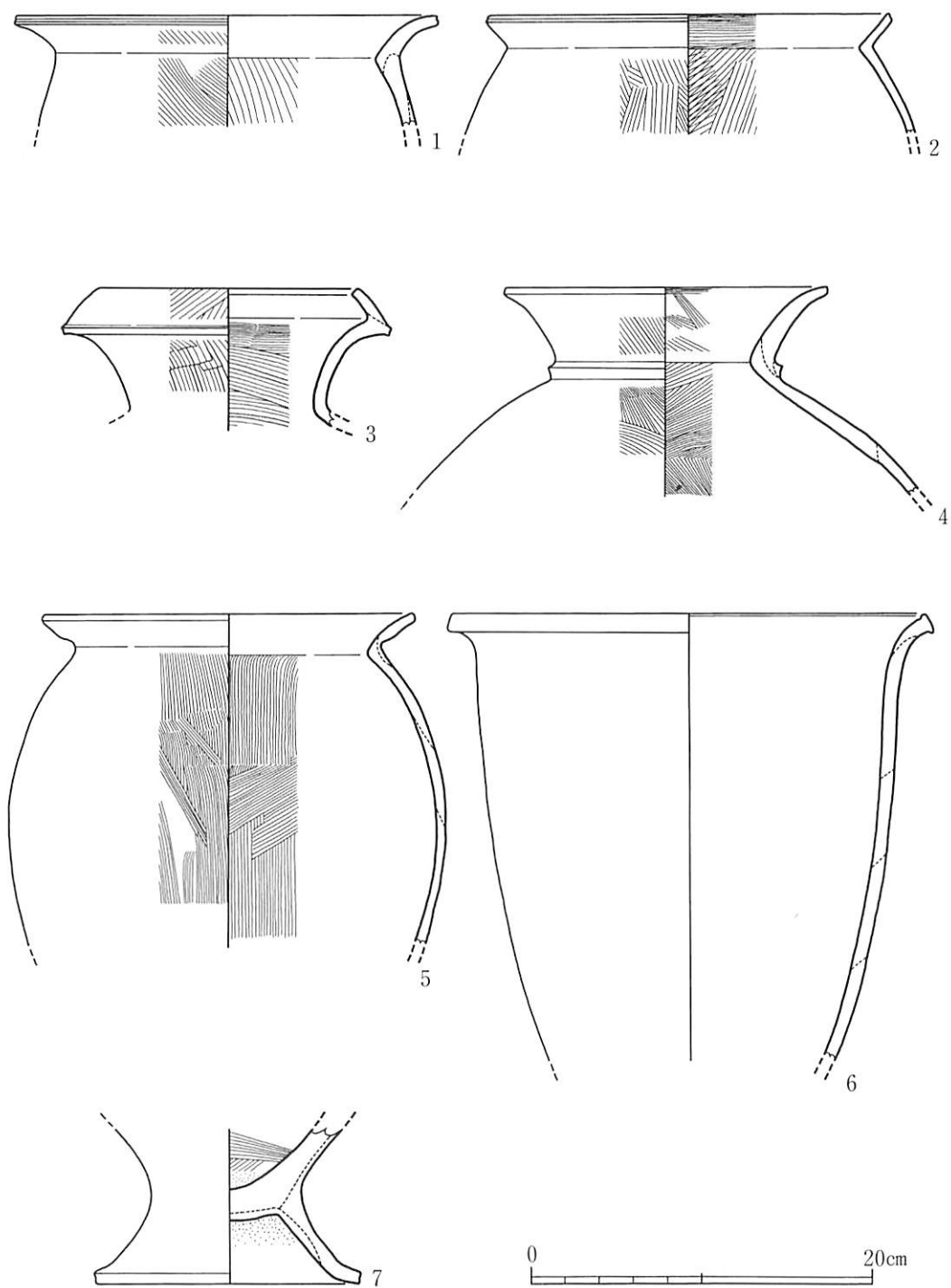
第14図 6号住居址実測図

の隅から、ピットが3基、北東-南西方向に並んで検出されたが、直径が北東から25cm、40cm、20cm、深さがともに10cmであり、性格は不明である。住居址内から柱穴を検出することはできなかった。(田中大介)

出土遺物 第15図-1は甕の上半分である。口縁部は「く」の字に折れ、ラップ状に外反している。屈曲部内面には明瞭な稜を有する。外器面は口縁部及び胴部にハケ調整、頸部にヨコナデを施している。口唇部には二条の沈線を施す。内器面は口縁部はヨコナデ、胴部はハケ調整で整えている。胎土は長石、石英、黒雲母を含み、焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。2は甕の上半分である。口縁部は「く」の字に折れ、直線的に開く。屈曲部内面には明瞭な稜を有する。外器面は口縁部及び胴部にハケ調整を施し、その後口縁部及び頸部にヨコナデを加えている。内器面は口縁部は横方向、胴部は斜め方向にハケ調整で整えている。胎土は長石、石英、金雲母を含んでおり、焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。3は複合口縁壺の口縁部である。やや丸味を帯びて内傾しており、屈曲部には明瞭な稜を有する。外器面は全面にハケ調整を施し、その後、屈曲部下部及び頸部にヨコナデを施す。内器面は屈曲部より下側全面をハケ調整で整えている。胎土は長石、石英、金雲母を含み、焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。4は壺の口縁部から胴部にかけての部分である。口縁部はゆるく外反し、屈曲部内面には明瞭な稜を有する。頸部に三角突帯を一条付す。内外器面とも全面をハケ調整で整えている。口唇部及び突帯の両側、頸部内面にヨコナデを施している。胎土は長石、石英、角閃石などの砂粒を含み、焼成は良好で、橙色を呈する。5は甕の口縁部から胴部にかけての部分である。口縁部は「く」の字に折れ開き、最大径は胴部の中央よりやや上位に位置する。内外器面ともに胴部にハケ調整を施している。胎土は長石、石英、黒雲母、金雲母を少量含み、焼成は良好で、淡黄色を呈する。6は甕の口縁部から胴部にかけての部分である。口縁部はゆるく外反しており、胴部は張ることなく、そのままゆるやかに底部へと向かう。最大径は口縁部に位置する。内外器面ともに全面にヨコナデを施している。胎土はきめが粗く、長石、石英、角閃石、黒雲母を多量に含んでおり、焼成は不良である。器面は外器面はにぶい橙色、内器面はにぶい赤褐色を呈する。二次焼成を受けており、外器面の胴部下半はにぶい赤褐色に変色し、上半はススが付着している。7は甕形土器の脚台である。裾部は外反気味に開き、裾端部は角張っている。外器面は全面をヨコナデで整えている。内器面は不規則なハケ調整を施している。胎土は長石、石英、黒雲母、金雲母を含み、焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。胴部外器面にススが付着している。また底部及び脚内面に砂型を有する。(清田志野)

本住居址で出土した石器は、そのほとんどが埋土中から出土したものである。床面直上から出土した石器は石器製作に伴うと考えられるチャート製のチップ及び軽石等である。チャート製のチップは、5mm以下のものであり、磨製石鏃を製作する過程において作られたものであると思われる。

第16図-7~9は打製石鏃である。7は珪質頁岩製で重さ0.6g、8は姫島産の黒曜石製で重さ0.25gであり、裏面の中央に成形時の大きな剝離痕が見られ、側縁部を両面から鋸歯状に押圧



第15图 6号住居址出土遗物实测图(1)

剥離することによって調整している。9はチャート製で重さ0.5gで、交互剥離によって刃部が形成されている。これらの石鏃の形態は凹基無茎鏃である。

4・5は磨製石鏃である。4は黒色頁岩製で重さ6.5gであり、凹基無茎式で形態は柳葉形状をしている。全面がきれいに研磨されており、研磨方向は左上から右下にかけてである。5は黒色頁岩製で重さ1.9gの平基無茎鏃である。表面全体がきれいに研磨されており、特に刃部は鋭く研磨されているため、先端部は鋭利なものとなっている。また、刃部の所々に欠損部が見られる。

1～3は磨製石鏃未製品である。1・2は剥片を取った後、石材の周囲に打撃を加え、整形途中のものである。1はチャート製で重さ11.5g、2は輝緑凝灰岩製で重さ1.7gである。3はほぼ整形が終わり研磨の段階に入っているものである。石材は輝緑凝灰岩で重さ1.1gである。

6は石庖丁未製品である。チャート製で重さ35.4gであり、大まかな整形の後研磨されている。左右両端は折れており、穿孔はない。刃部が明確に形成されていないことから未製品であると思われる。

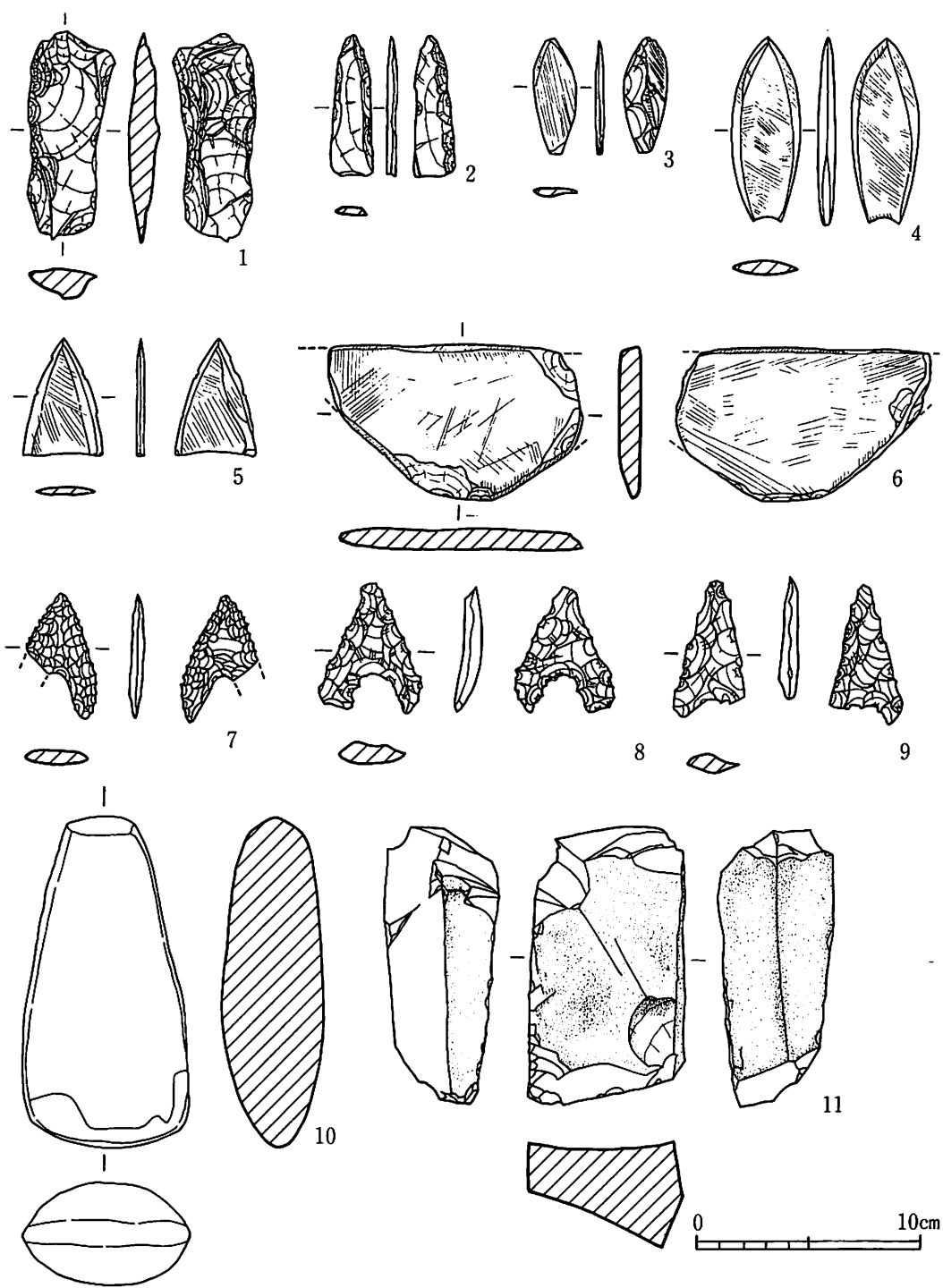
10は磨製石斧である。点紋片麻岩製で重さ176.5gであり、全面に調整による敲打痕が見られ、刃部は使用により摩滅している。基部は研磨により整形されている。

11は砥石である。凝灰岩製で重さ550gであり、表面は割れており、当時の面と考えられるのは表面及び両側面である。その中で表面と左側面は使用されたと思われる擦痕はあるが、明確な研磨痕は見られなかった。表面には集中的に使用されたと思われるくぼみが3カ所見られる。右側面はほぼ中央に縦方向の稜を有するが、使用した痕跡は認められなかった。

時期 住居地の時期については、床面直上から出土している土器と住居地上層出土の土器に明確な時期差が認められず、住居地内の埋土は短期間の間に堆積が行われたものと思われる。したがって、二次的利用面についても長期間にわたって使用されたものではないと考えられ、他の住居地との類似も合わせて、弥生時代後期前葉のものであると考えられる。(田中大介)

層位	攪乱	II a層	II b層	II c層	III層	IV層	床面直上
土器 第15図	4・6		5 1			2・3・7	
石器 第16図	11	8・10	4・5・6	3・9		1・2・7	

第6表 6号住居地出土遺物実測図一覧表



第16图 6号住居址出土遗物实测图(2)

6. 土壌（第17図、図版3）

今回の調査では土壌が計4基検出された。3号住居址の東壁に隣接して径約1mの円形のもの1基、4号住居址の西隅に隣接して長さ3mの半月形のもの1基存在する。共に住居址に切られており、各住居址に先行するものと考えられる。また3号住居址の南西側約1mの地点に長径1.7mの楕円形のもの1基、6号住居址の北西側約4mの地点に長径約2mの楕円形のもの1基存在する。

調査の日程上3号住居址南西側の土壌（1号土壌）のみ掘り下げを行った。以下その概要を記す。

土壌はO-12グリッドに所在する。

肩の部分の形状は南北に長い楕円形を呈していて、主軸方位は北-南方向であり、長軸は1.7m、短軸は0.9mである。深さは0.5mである。壁はおおむね垂直に掘り込まれており、底面は平坦では楕円形である。

埋土は単一であり赤黒色(Hue2.5YR1.7/1)を呈する。粒子は細かく、しまりはなく、粘性はある。混入物は基本的にはみられないが、底面近くでは斑状に第2層褐色シルト層の土を含んでいる。このことから土壌が掘り込まれてから短期間のうちに埋め戻されたと考えられる。

遺物は出土していない。

この土壌の時期は、他の遺構との切り合いがなく、かつ遺物を一点も出土しておらず、不明である。

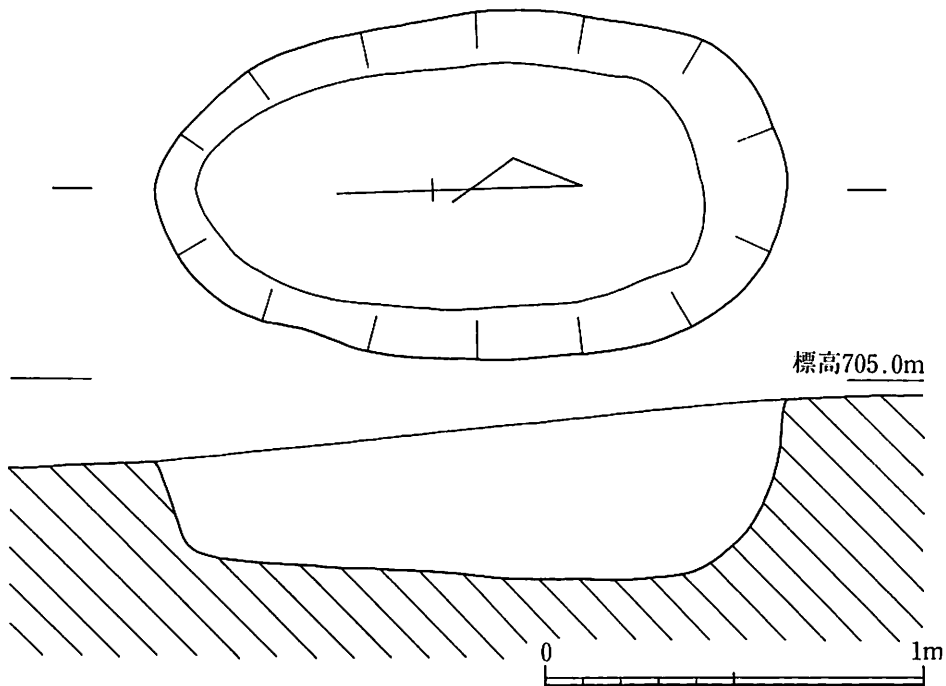
7. トレンチ（第4図、図版8）

遺跡の範囲確認のため、住居址群の北方に1本、西方に3本の計4本のトレンチを設定した。

1号トレンチは3号住居址の北側のP-5～9グリッドに設定された、南北20m×東西1mのトレンチである。耕作土である第1層暗褐色シルト層を約30cmほど掘り下げたところで遺構検出面である第2層褐色シルト層となり、この上面で精査を行ったが遺構は検出できなかった。また、遺物は出土していない。

2号トレンチは6号住居址の西側のF-16、G-16、H-16、I-16、J-16、K-16、L-16グリッドに設定された、南北1m×東西27mのトレンチである。第1層を約30cmほど掘り下げたところで第2層に到達し、G-16グリッドからH-16グリッドにかけての部分に落ち込みを検出した。この遺構の埋土は、周りの第2層の土とは異なり、住居址の埋土の第1層にあたる黒色土である。また遺構の形状及び大きさから判断して竪穴住居址の角の部分であると考えられる。これを7号住居址と名付けた。

3号トレンチは2号トレンチの北側のK-14、L-14グリッドに設定された、南北1m×東西8mのトレンチである。第1層を約20cm掘り下げたところで第2層に到達し、L-14グリッドに落ち込みを検出した。この遺構の埋土は、周りの第2層の土とは異なり、住居址の埋土の第1層にあたる黒色土と第II層の褐色土である。また遺構の形状及び大きさから判断して竪穴住居址の角の部分であると考えられる。これを8号住居址と名付けた。



第17図 土壌実測図

4号トレンチは2号トレンチの南側のI-19、J-19グリッドに設定された、3号トレンチ同様南北1m×東西8mのトレンチである。第1層を約30cm掘り下げたところで第2層に到達し、I-19グリッドに落ち込みを検出した。この遺構の埋土は、周りの第2層の土とは異なり、住居址の埋土の第1層にあたる黒色土である。遺構の形状及び大きさから判断して竪穴住居址の角の部分であると考えられる。これを9号住居址と名付けた。

また、3号住居址の西側約10mの地点で廃土の除去の際に住居址の一部分の可能性ある遺構と思われるものが発見されているが、今回の調査では確認していない。

2～4号トレンチの調査の結果、1～6号住居址と同様の第2層上面より3基の住居址が検出された。このことから当遺跡においては少なくとも9基以上の竪穴住居址が存在したことになる。また、住居址群の範囲は調査前に考えられていたよりもさらに西側に広がる事が判明し、また台地の頂部でありやや標高が高くなっている北側には広がらない可能性が考えられる。よってこれらの住居址は環状の配置を呈していることが判明した。(岩谷史記)

四 過去の検出遺構および遺物

高畑赤立遺跡は1987年8月に1回目の発掘調査が実施されている。この調査において確認された5基の住居址のうち、2号住居址のみが完掘された⁽¹⁾。また、今回の調査以前にも遺物が採集されている。2号住居址の調査結果、出土遺物、調査以前の採集品と今回の調査において、表土より出土した遺物についてその概要を述べる。

1. 2号住居址 (第18図)

位置 2号住居址はG-14、H-12、13、14、15、I-12、13、14、15、J-13、14、15グリッドにかけて検出され、いままでに発掘された6つの住居址の中で最も西に位置する。

構造 平面形は長方形で主軸は北西-南東軸で規模は長軸7.7m、短軸6.9mである。柱穴は東、西隅付近にあり、その配置から北・南隅付近にも柱穴が存在したと考えられるが、検出できなかった。柱穴の内側に炉をとり囲むように4本の副柱穴が配置されている。炉は南西側副柱穴間に位置し、長径76cm、短径65cmの楕円形を呈しており、深さは22-26cmである。用途不明のピットが炉の南側に2基検出され、東側のものは長径36cm、短径16cmの不整楕円形である。西側のものは長径50cm、短径30cmの不整楕円形で、内部には炭化物を含む灰が堆積していた。

所見 床面から15-30cmほど上位に炭化物を含む面が広がっており、焼土が3か所から検出された。またクリ、カヤの炭化材が出土したことから、2号住居址は廃絶後埋没してゆく過程で二次使用があったと考えられている。

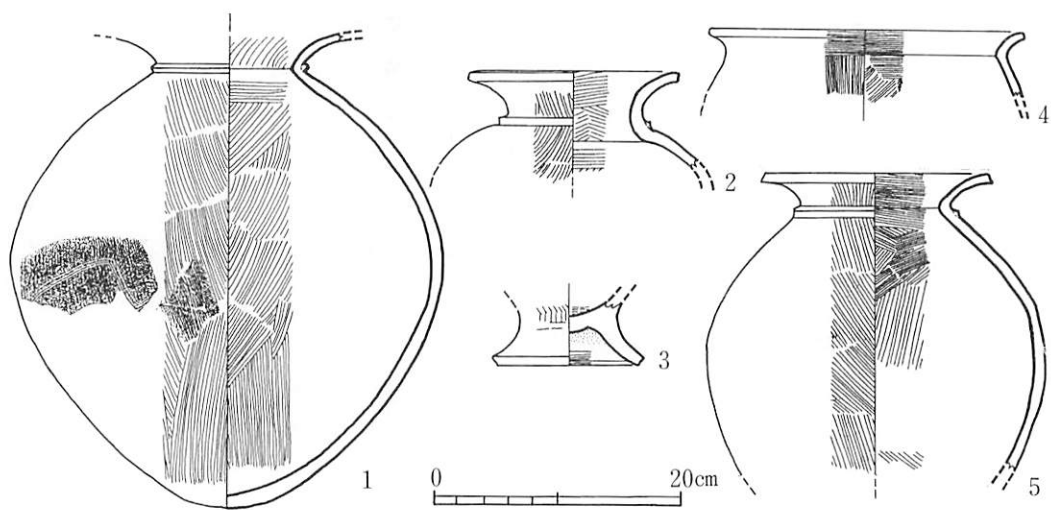
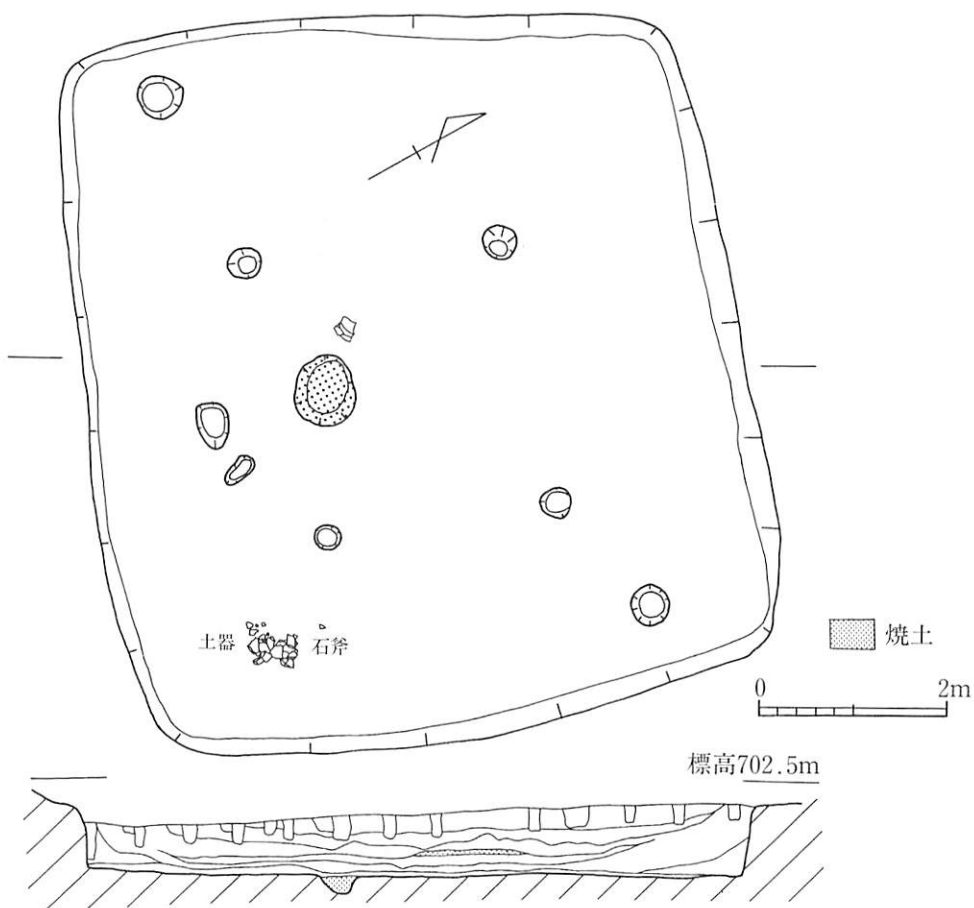
出土遺物 第18図-1の壺は口唇部を欠くが、ほぼ完形である。口縁部が大きく外反し、頸部に断面三角形の突帯が1条めぐらされている。内、外器面ともにハケ調整がなされており、外器面にはスガが付着している。床面より出土した。2の壺は口唇部に丸みを帯び、口縁部は大きく外反し、頸部に断面三角形の突帯が1条めぐらされている。ほぼ全面にハケ調整を施した後にナデ調整を行っている。5の壺は口縁部が大きく外反し、口唇部が角ばっている。頸部の内面に明らかな稜を有し、断面三角形の突帯が1条めぐらされている。内、外器面とも粗いハケ調整を施し、内器面は部分的に縦方向のナデ調整を行っている。内、外器面ともにスガが付着している。3は甕の脚部である。内部に砂型を有する。外器面はハケ調整の後、くびれ部より下にヨコナデを施している。内器面にも横、斜め方向のナデ調整を施している。4の甕は口縁部がゆるく外反し、頸部内面に明らかな稜を有する。口縁部と頸部内器面にはヨコナデを行い、胴部には内、外器面ともに細かなハケ調整を施している。これらの出土土器はその特徴から弥生時代後期前葉に位置付けられる。

石器は計6点が出土した。磨製石鏃、打製石鏃、スクレイパー、打製石斧各1点、砥石2点である。

(若杉竜太)

註

(1) 蘇陽町教育委員会『高畑赤立遺跡発掘調査報告書』、1988。



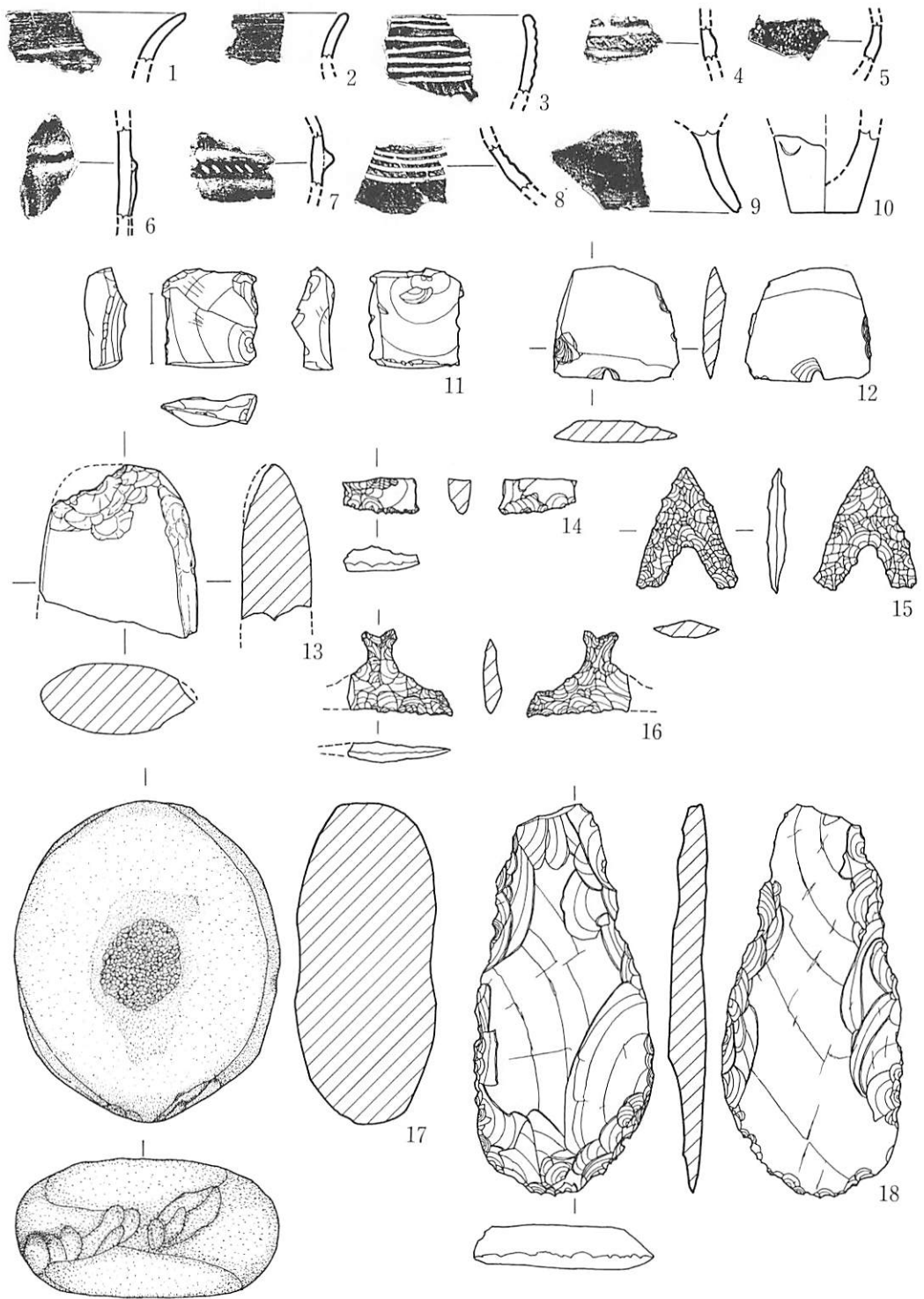
第10図 2号住居址および出土遺物実測図

2. 採集遺物 (第19図 図版13)

土器は今回の調査で表土中より出土したものが計24点、表面採集のものが計538点である。そのうち10点を図示した。第19図-1は壺の口縁部である。外器面にはヨコナデが施されている。細かい長石を含み、焼成はやや軟質である。色調は灰茶褐色である。2は甕の口縁部である。細かい長石を含み、焼成は良好である。色調は赤茶褐色である。外器面にススが付着する。3は深鉢形土器の口縁部である。外器面に黒色磨研が施されており、文様から縄文時代晩期前半の古閑式土器に比定される。細かい長石を含み、焼成はやや良好である。色調は黒褐色である。外器面に炭化物が付着する。4は深鉢形土器の胴部である。単節縄文LRを施文しており、文様から縄文時代後期前半の太郎迫式土器に比定される。細かい砂粒を含み、焼成は良好である。色調は黒褐色である。5は深鉢形土器の胴部である。単節縄文RLを施文しており、施文方法から縄文時代中期の竹崎式土器に比定される。大粒の砂粒を含み、焼成は脆く、軟質である。色調は黒褐色である。6は甕の胴部である。工字突帯文を有する。砂粒を含み、焼成は良好である。色調は暗黒褐色である。外器面に炭化物が付着する。7は壺の胴部である。刻目突帯文がめぐらされている。砂粒を含み、焼成はおおむね良好である。色調は灰茶褐色である。外器面にはススが付着する。8は免田式土器の壺の胴部片である。胎土は細かく、焼成は良好である。色調は赤茶褐色である。9は甕の脚部である。外器面にはヨコナデが施されている。長石を含み、焼成は良好である。色調は灰茶褐色である。10は甕の底部である。内、外器面ともタテナデが施されている。小砂粒、石英を含み、焼成は良好である。色調はにぶい黄褐色である。内器面にはススが付着する。

石器は今回の調査で表土中より出土したものが計16点、表面採集のものが計26点である。そのうちの8点を図示した。11はチャート製の使用痕のある剥片である。形状はほぼ正方形を呈しており、重量は9.7gである。側縁部に細かい剝離面がある。下端部にも使用痕が認められる。12は結晶片岩製の石庖丁の未製品である。形状は台形を呈しており、重量は10.5gである。表面右側縁部の打撃痕は穿孔のためのものである。刃部は両端とも調整されている。13は硬質砂岩製の磨製石斧の基部片である。形状は半楕円形を呈する。この磨製石斧のみ調査以前の採集遺物である。14は黒曜石製の刃器である。形状は長方形を呈しており、両面から交互に剝離を行い、刃部を作出している。15はチャート製の打製石鏃である。形状は二等辺三角形を呈しており、重量は0.5gである。両側面から押圧剝離を施して成形したのち、基部に打撃を加え、えぐりを入れている。16は黒曜石製の石匙である。両側からの加工によりつまみ部が作り出されている。刃部には押圧剝離を行って調整を施している。17は安山岩製の凹石である。形状は楕円形を呈しており、重量は500.0gである。また下端部に敲打痕が認められることから敲石としても利用されたと考えられる。18は珪質砂岩製の打製石斧である。重量は95.0gである。刃部付近には新しい剝離が多くある。

(若杉竜太)



第19図 表土出土および採集遺物実測図

五 蘇陽町の弥生時代の遺跡

熊本大学考古学研究室では熊本県阿蘇郡蘇陽町『蘇陽町誌』編纂のために、蘇陽町内各地でみつかった遺物の収集・資料化、遺跡の測量調査等を行っている。本章ではその資料の一部から、弥生時代の遺跡と考えられる4遺跡の概要、その表面採集遺物を簡略に紹介したい。

1. 猿丸遺跡（第20図－1～8、図版15）

猿丸遺跡は蘇陽町内の北方、阿蘇郡高森町との境界付近を走る国道325号に面した独立丘陵状の台地上に立地し、海拔高度は約750mほどである。台地頂上は公園化・道路舗装のため削平を受けており、周囲の遺跡保存状態は芳しくない。今回の調査では主に遺跡周辺での表面採集活動、及び断面に現れている遺構検出面の確認と写真撮影を行った。農道脇の土手断面に露出している遺構からは、遺物を多く採集できた。その断面をみると、表土下の灰黒褐色土層がその直下の褐色土層と接するあたりで、炭化物を多く含むようになる。この層はほぼ水平方向に堆積しているが、約15×40cmの落ち込み部分がみられ、そこでは更に炭化物が集中している。この落ち込み部分を炉の掘り込みと考えるならば、ここが住居址である可能性もでてくる。周辺を踏査した結果、上記のものと同様の性格をもつ露出断面が他に3ヶ所認められた。

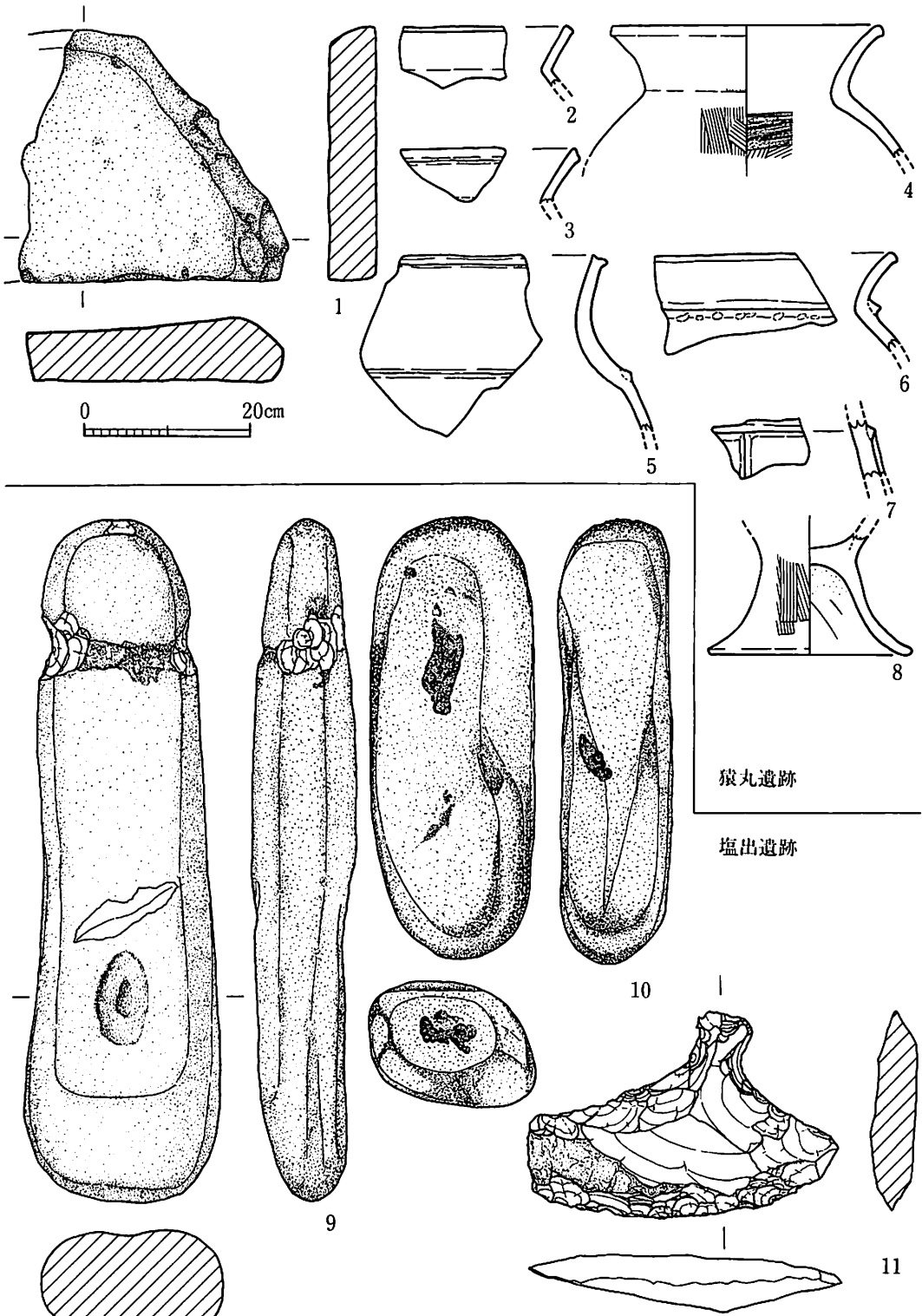
第20図－1は熔結凝灰岩製の石皿である。最大長40cm、幅30cm、厚9cmを測る。2・3は壺の口縁部片である。3は口縁部に突き出た稜をもつ。4は壺の口縁部から頸部片である。堅くしまった胎土をもち、二次焼成を受けている。5は小型壺の口縁部から胴部片である。胎土は角閃石を多く含む。口唇部に丸みを帯びて突き出た稜、肩部に1条の三角形の突帯をもつ。突帯より下位では器壁が薄くなる。6は壺の口縁部から頸部片である。胎土に金雲母が多くみられる。断面が三角形を呈する突帯を持ち、工具による押し付けがみられる。7は甕の胴部片である。工字突帯文をもつ土器である。胎土は2～5mm大の礫石を多く含む。8は甕の脚部である。内器面では“砂型”がみられ、脚はやや屈曲して朝顔状にひらく。

以上、遺構と遺物から、猿丸遺跡は弥生時代後期の集落址であると思われる。

2. 塩出遺跡（第20図－9～11、図版16）

塩出遺跡は蘇陽町内の西方、上益城郡清和村と接する辺りに位置する塩出迫字に所在する。遺跡は北に突き出た舌状台地上に立地しており、東側近辺では整地された芝地・耕作地が広がっており、西側では斜面に針葉樹が植林されている。遺物が採集されたのは海拔高度630mほどの平坦地で、面積は約3370㎡である。現在は芝地及び耕作地として利用されている。以前に石匙・石錘が表面採集されており、今回は測量を行った。

第20図－9は紐を結ぶための袢りをもつ砥石である。剝離調整と敲打による袢りがほぼ一周している。表面は平滑になっており、実際に使用した痕跡がある。10は輝石凝灰岩製の磨・敲石であり、重さ380.5gである。上・下面に使用痕がみられる。11は横形石匙である。最大長6.3cm・幅9.6cm・厚1.5cm・重64gを測る。つまみ部周辺は大きく2枚剝離した後に、周縁部に剝離調整を施す。刃部の刃こぼれは認められない。



第20圖 各遺跡採集遺物實測圖(1)

3. 打棒木遺跡（第21図－1～9、図版14）

打棒木遺跡は上益城郡清和村に隣接する菅尾に所在し、国道265号線の西側に位置する舌状台地上に立地する。舌状台地は南東に突き出しており、比高差は10mほどである。台地頂上部は海拔高度610mほどを測り、極めてなだらかに傾斜しながら南東へ広がる芝地となっている。遺物が多く採集された舌状台地先端部の面積は約6750㎡である。現在では乳牛飼育のための牧草地として利用されている。遺物が多く発見されたのはこの牧草地であるが、遺構は発掘調査を経ていないため確認されていない。台地の斜面周辺では針葉樹林、傾斜が緩やかになる南側ではクヌギ・クリ畑として利用されている。今回の調査では、遺跡周辺の測量及び以前に地主が表面採集した遺物の収集・資料化を行った。

第21図－1～5は重弧文長頸壺の胴部片である。いずれも沈線による文様がみられ、特に2～4は重弧文をもつものと考えられる。5の器壁は薄く、施文も線が繊細である。屈曲部上位では格子目文と爪形文を交互に巡らしているが下位ではナテ調整しかみられない。6・7はチャート製の打製石鏃である。6は残存長3.0cm、幅2.1cm、厚0.4cm、重さ2.6gを計測し、7は長1.6cm、幅1.9cm、厚0.4cm、重さ0.7gを計測する。形態は凹基無茎式である。8はチャート製の勾玉である。両面穿孔で、最大長1.8cm、幅0.6cm、厚0.6cm、重さ2.0gを計測する。全体を滑らかに研磨しており、丸みを帯びた形状であるが所として扁平な面を残す。9は安山岩製の石皿である。中央より右下方向に使用痕がみられ、一部破損がある。

以上、出土した土器の様相からみて、弥生時代後期の遺跡であると予測される。

4. 椎屋戸石平遺跡（図版16）

椎屋戸石平遺跡については、すでに山下志保の発表がある⁽¹⁾。宮崎県高千穂町との境界に近い椎屋集落の西南約200mのところの所在する。五ヶ瀬川の支流のひとつである神働川に臨んだ谷が奥まった平坦地に立地しており、現在は畑地として耕作されている。海拔標高は、約560mである。今回の調査は遺跡近辺の写真撮影、踏査を行った。

遺物は畑の耕作の際に発見されたものであり、安国寺式の複合口縁壺、工字突帯文粗製甕、いわゆる免田式長頸壺、方形石包丁、小型の磨・敲石、局部磨製石斧などが出土している。

土器の特徴から、椎屋戸石平遺跡は弥生時代後期の遺跡であると考えられる。

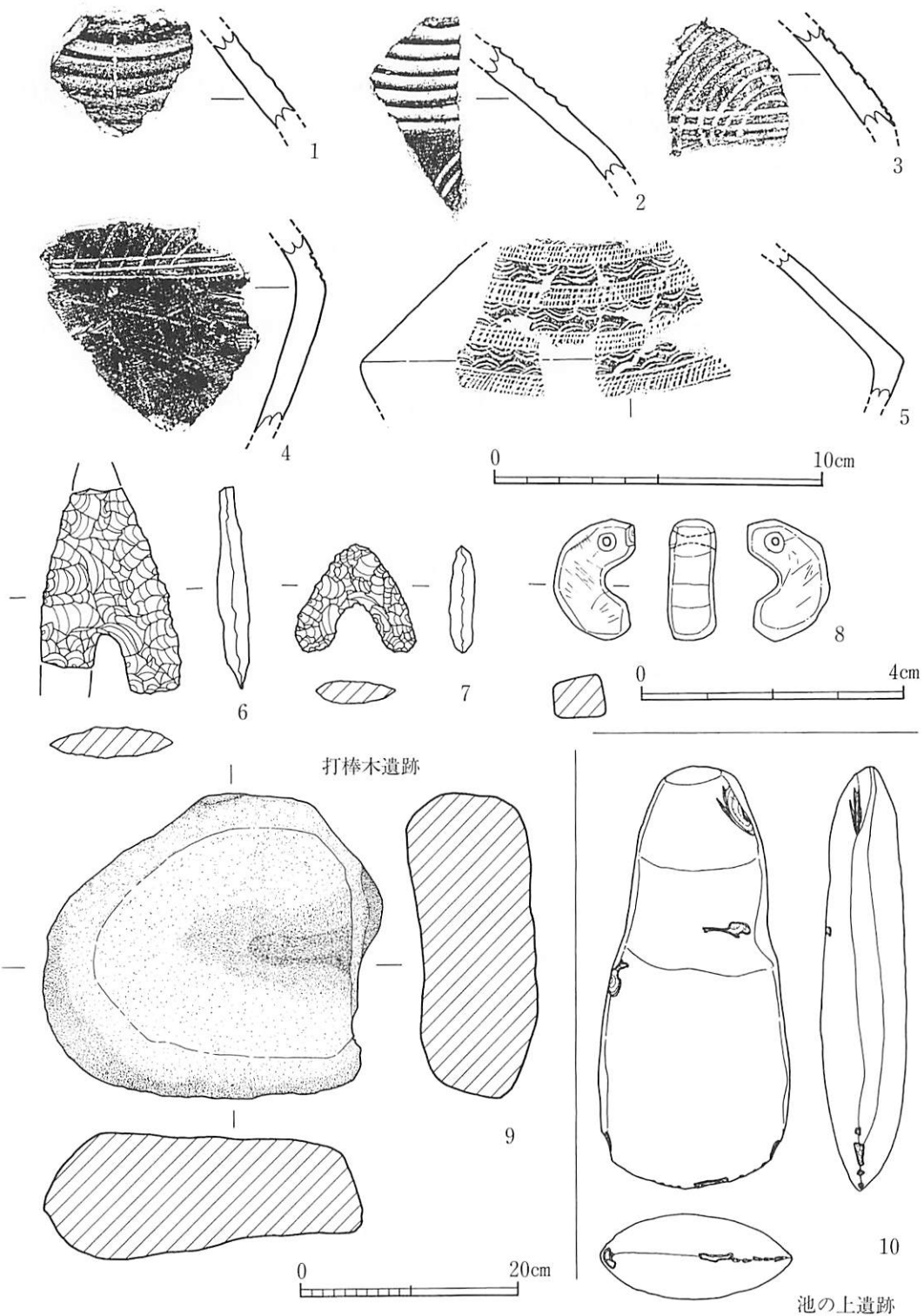
以上紹介した4遺跡の立地環境からみて、蘇陽町内の弥生遺跡は台地上の平坦地で営まれていた傾向がある。これはこの地域の縄文遺跡と共通しており、遺物が共伴することも多い。

前述の4遺跡から表面採集された遺物の他にも、属する時代は定かではないが、蘇陽町内各地で磨製石斧の発見報告がある。それが第21図－10の黒色頁岩製の磨製石斧であり、昭和14年、二瀬下字笹尾の池の上で採集された。最大長12.8cm、幅6.0cm、厚2.5cm、重さ260gを測る。全面がほぼ完全に磨かれており、光沢を放つ。刃部には使用痕としての刃こぼれがみられる。

（内菌拓也）

註

(1) 山下志保「熊本県阿蘇郡蘇陽町椎屋戸石平遺跡－中九州山岳地域の弥生時代をめぐって－」『九州考古学』第67号、1992年。



打棒木遺跡

池の上遺跡

第21図 各遺跡採集遺物実測図(2)

六 ま と め

赤立遺跡からは前回の調査と今回の調査を合わせて、9軒の住居址と4基の土塚が検出され、弥生土器を中心とした遺物が出土した。ここでは前回の調査結果をふまえながら、今回の調査結果について概括してみたい。

住居址は前回の調査時に確認されていた5軒のうち2号址を除く4軒（1・3・4・5号住居址）と今回確認した4軒のうちの1軒（6号住居址）を完掘した。これらの住居址は出土した土器より弥生時代後期前葉に位置付けられるものである。

土塚は3号住居址に近接する1号土塚のみを完掘した。出土遺物はなく、時期は不明であるが、土塚の平面形と埋土の状況から墓塚と推定できる。

遺跡の範囲確認の為に設定したトレンチの調査結果から、住居址群は3号住居址よりも北側には広がらず、西側に展開する事が予想される。住居址群の配置については集落の全域が発掘できたわけではなく、現在のところ不明であるが環状配置をとる可能性がある。

完掘した住居址にはいずれも床面より上層に焼土や炭化物が面的に広がっており、住居址がいったん廃絶された後、完全に埋没しないうちに再利用されたと考えられる。前回調査された2号住居址にもこのような再利用面が検出されており⁽¹⁾、赤立遺跡の住居址に共通してみられる現象として捉えることができる。これらの再利用面から出土した土器は床面出土の土器と時間差がなく、短期間のうちに再利用されたことがわかる。また、今回調査された住居址群にみられる他の特徴として、床面より炉が検出されない、もしくはされても焼土が形成されていない点があげられる。このことは床面を利用した営みが長期にわたるものではなかったことを示すものである。この点と先の短期間の内の住居址の再利用を考え合わせると、赤立遺跡はさほど定着性の強い集落ではなかった可能性が指摘でき、短期間のうちに繰り返し利用されるような居住形態が推定できよう。上述したような所見はほぼ同時期の大分県の石井入口遺跡でも得られており⁽²⁾、阿蘇地方における弥生時代後期の集落のあり方を考える上で興味深い。しかし、一方で4号住居址の再利用面からはほぞ穴を持つ柱材が出土しており、これらの再利用面にはしっかりした上屋構造が存在したと考えられ、住居址の再利用の仕方は単なる夜営地といったものではなかったと言えるだろう。

今回の調査で出土した土器の量はパンケースで10箱程であり、量的にはさほど多いものではない。

縄文時代の土器には中期の竹崎式、後期の太郎迫式、晩期の黒川式がある。これらは表土や住居址の埋土から出土しており、縄文土器の包含層は確認されていない。過去には早期の押型文土器や前期の曾畑式土器が採集されており⁽³⁾、赤立遺跡は縄文時代を通して利用されていたことがわかる。しかし、いずれの土器も少量であり、長期にわたって集落が営まれていたとは考えにくい。

主として出土した土器は弥生時代のものである。これらの多くは表土ないし住居址から出土

したものであり、層位的な出土例は存在しない。また、住居址自体にも二次利用の痕跡があり、住居址出土資料も良好な一括資料とは言えない。しかし、全体の器形を知ることができる土器が数点出土しており、これらの資料をもとに土器の年代的な位置付けを行なうとともにその特徴について述べておく。

赤立遺跡出土の土器については以下のような特徴がある。

- 1、出土した器種は大型の壺と甕がほとんどであり、小型の壺や鉢は少ない。
- 2、壺の器形は頸部が大きくくびれ、口縁部がゆるく外反するものがほとんどであるが、胴部最大径は肩にあるもの、胴部中位にあるものなどまちまちであり、いわゆる「肥後型壺」B類に分類されるものである⁽⁴⁾。甕の器形はやはり頸部がくびれ、口縁部がゆるく外反するものが多く、その大部分は脚台が付くと思われ、いわゆる「肥後型甕」のC類に分類されるものである⁽⁵⁾。
- 3、壺の頸部ないし胴部に粘土紐の貼付による断面三角形の突帯あるいは刻目突帯を有するものがある。
- 4、甕の脚部にはすべて砂型が認められる。
- 5、壺および甕ともに器面調整はハケ調整を基本とし、その上からナデによって仕上げを行っている。
- 6、甕に限らず壺にも2次焼成痕が観察できる。

これらの特徴のうち2、3、4より本遺跡出土土器は玉永編年の後期I期（後期前葉）に比定できる⁽⁶⁾。住居址の項で述べられているように、各住居址およびその上層の利用面出土の土器には時間差がみられないことから、赤立遺跡は弥生時代後期前葉に営まれた集落であると考えられる。

また、1の小型の土器が少ないという傾向性はほぼ同時期の大分県竹田市の内河野遺跡や石井入口遺跡などでも指摘されており⁽⁷⁾、阿蘇外輪山地域の該期の特徴として捉えられる。

5からは、壺と甕の製作技法が基本的に同じであったということできるだろう。6と考え合わせてみると興味深い。そして6の壺と甕の両方に二次焼成痕があるということは、実際の使用状況が壺と甕ともに同じであったということである。同様の事例は同じ蘇陽町の戸石平遺跡においても報告されており⁽⁸⁾、阿蘇地域における貼付突帯を持つ壺の成立と土器様式内の器種分化という観点から再考が必要であろう。

これらのほかに特記すべき点として、工字文突帯をもつ甕と複合口縁壺、およびいわゆる免田式の壺が出土したことがあげられる。工字文突帯をもつ甕と複合口縁壺は大野川上流域を中心に分布するものであり、赤立遺跡に居住した人々がこの地域と交流をもっていたことを物語るものである。また、免田式土器はこれまで赤立遺跡では知られていなかったものである。

赤立遺跡から出土した石器には打製石鏃、磨製石鏃およびその未製品、砥石、磨石類、石皿、石匙、磨製石斧、石庖丁、紡錘車などがある。出土地点と形態から弥生時代の石器と考えられるものには、磨製石鏃およびその未製品、砥石、磨石類、石皿、石庖丁、紡錘車がある。

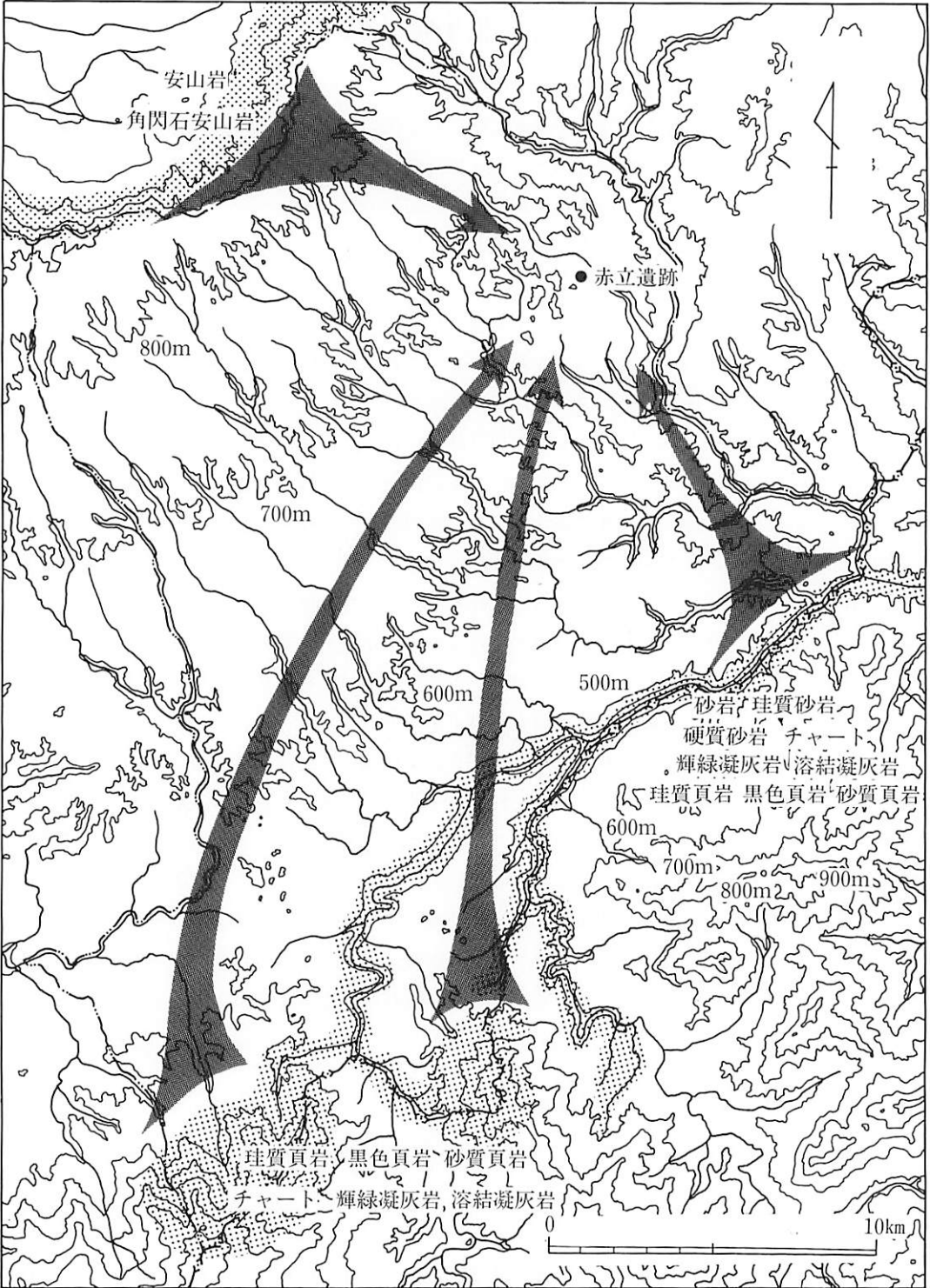
これら石器に使用された石材は住居址の項に示したとおりである。これを見るといずれの石材も赤立遺跡から直線距離にして10km程南に離れた鏡山付近や神の前の露頭、あるいは五ヶ瀬川の河原に転石として存在するものが大部分を占めている⁽⁹⁾ (第22図)。石材別に石器をみると石皿には安山岩、砥石には砂岩、磨製石鏃にはチャート、輝緑凝灰岩、石包丁と紡錘車は珪質片岩などと石器の器種によって使用される石材が決まっており、石材選択を行っていたことがわかる。また、赤立遺跡からは磨製石鏃の完形品および未製品、砥石などが出土しており、集落内で磨製石鏃の製作を行ったと考えられる。出土した未製品から製作工程を復元すると、石核からの素材剝離→細部調整による整形→研磨の3段階に分けられる。特に6号住居址からはチャートの石核や碎片が出土していることから、6号住居址において素材剝離と細部調整が行われていたことはほぼ確実である。また、5号住居址では細部調整の行われたチャート製の未製品と砥石が、1号住居址からは砥石が出土していることから、少なくともチャート製の磨製石鏃に関しては素材剝離から完成品の製作までの磨製石鏃の製作工程が復元できるとともに、各住居址において分業がなされていた可能性も指摘できる。この場合、製作された磨製石鏃が、製品として搬出されていたと考えられるが、今回出土した資料は磨製石鏃全体で71点、そのうち未製品が64点、完形品が7点であり、製品を搬出していたと断言するには量的にみてややとまどいを覚える。また、赤立遺跡が石器の製作址であるとすれば、今回出土した石包丁や紡錘車なども集落内で使用されたものではなく、製品として製作されたものであった可能性がある。

以上、赤立遺跡について簡単に概括を行った。今回の調査で明らかになったことは赤立遺跡が従来考えられていたよりも大きな集落であったということ、長期にわたって定着性をもった集落ではなく、弥生時代後期前葉という限られた時期に繰り返し再利用されていたこと、磨製石鏃の製作址であったことなどがあげられる。しかし、集落全体の構造やその性格については集落全域の発掘が行われたわけではなく、未だ解明されていない点も多い。今後の一層緻密な調査が期待される。

(山田康弘)

註

- (1) 蘇陽町教育委員会『高畑赤立遺跡発掘調査報告書』、1988年。
- (2) 後藤一重『菅生台地と周辺の遺跡XV』竹田市教育委員会、1992年。
- (3) (1)に同じ。
- (4) 玉永光洋『豊後における肥後型土器について』『九州考古学』第57号、1982年。
- (5) (4)に同じ。
- (6) (4)に同じ。
- (7) 小林昭彦・小柳和宏編『菅生台地と周辺の遺跡XII』竹田市教育委員会、1987年。
- (8) 山下志保『熊本県阿蘇郡蘇陽町椎屋戸石平遺跡一中九州山岳地域の弥生時代をめぐって』『九州考古学』第67号、1992年。
- (9) 松本幡郎前熊本大学教授の御教示による。



第22図 赤立遺跡出土石器石材供給地

付編 北平横穴墓

1. 位置と環境 (第1・23図、図版17)

北平横穴墓は阿蘇郡蘇陽町大字橘字北平に所在する(第1図)。蘇陽町大字橘は、蘇陽町の東端部近くに位置しており、東方3kmのところには宮崎県との県境である五ヶ瀬川が存在し、横穴墓の北400mのところには五ヶ瀬川の支流である旅草川が流れる。付近一帯には、熔岩台地が浸食され独立丘陵状を呈する台地が点在しており、横穴墓はそれら丘陵のひとつ、南西側斜面の頂部近く標高535m付近に立地している。

横穴墓の存在する丘陵は、昭和37年の道路造成によって西側が南北方向に削平されている。丘陵北側は自然地形を留め、なだらかな斜面となっており、南側では道路造成以前から丘陵上を芋畑として開墾してあるため、2段の階段状に削平されている。これによって丘陵南側にはテラス状の平地が形成され、芋畑として利用されていたが、現在は竹林となっている。丘陵西側を走る道路両沿いも竹が生い茂っており、丘陵北側斜面は杉林となっている。丘陵南西側から南東側にかけての低地は、現在は耕作地として利用されている。横穴墓はほぼ南方向に開口している。調査前は、天井前面部が後世の開墾等によって破壊され、横穴墓内部には土砂が大量に流れこみ埋没していた。横穴墓周辺は竹林となっており、横穴墓内壁全面に竹の根が貼り巡っていた。なお現状では後背墳丘は認められない。同丘陵上において他の横穴墓の有無を確認するため、ボーリングステッキによる調査をおこなったが、発見することはできなかった。当丘陵では現在のところ、確認できる横穴墓は1基のみである。

当丘陵の南側約40mのところ、谷を挟んで丘陵が存在している。この地点は1974年に調査が行なわれ、複数の横穴墓の存在が確認されており北平1号墳として簡単な報告がなされている⁽¹⁾。この丘陵も昭和37年の道路造成時に、北西側に大幅な削平を受けており、現在は道路脇の斜面に1基、奥壁のみが確認できるにすぎない。出土遺物として土器・鉄刀等が報告されているが、現在は散失している⁽²⁾。周辺には数基の横穴墓の存在が考えられるが、削平が激しく確認はできない。この報告において今回調査した横穴墓は、北平2号墳として紹介されている。また、ふたつの丘陵を結ぶ道路脇に熔結凝灰岩製の閉塞石片があったと報告されているがこちらも現在散失している⁽³⁾。

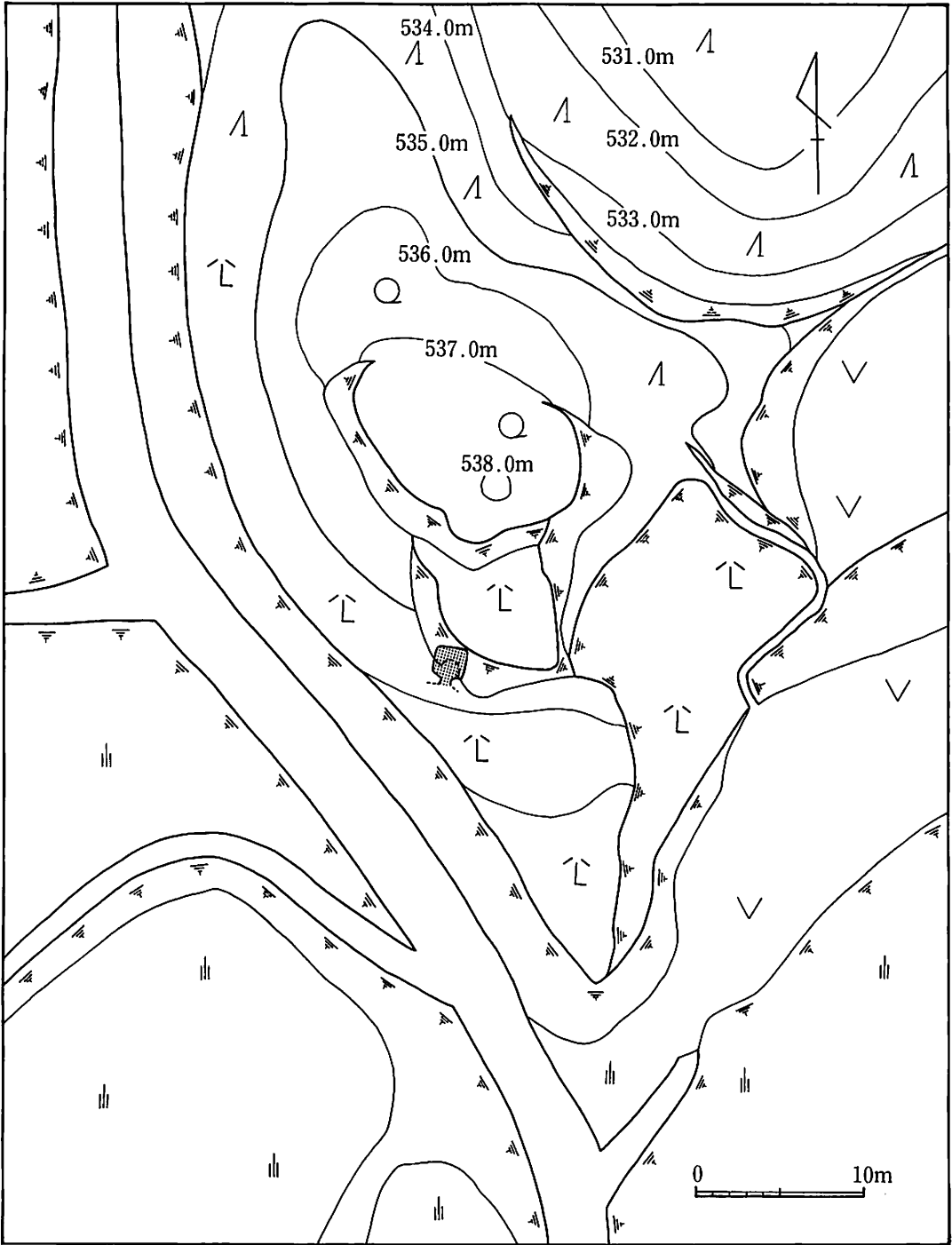
(本田浩二郎)

註

- (1) 熊本県教育委員会「熊本県遺跡台帳」、1962年。
- (2) (1)に同じ。
- (3) 蘇陽町教育委員会「蘇陽町埋蔵文化財調査概要」、1974年。

2. 横穴墓の概要 (第24図、図版17)

玄門から玄室前半部分にかけての天井部は破壊されている。横穴墓の主軸方向はN-169°-Wで、5回目の噴火による阿蘇熔結凝灰岩⁽¹⁾の岩盤をくりぬいて造られている。壁体は灰褐色を呈し、パミスを多く含み、軟質で剥落がひどい。玄室は長さ2m、幅は入口部で2.04m、奥壁部



第23图 北平横穴基周边地形测量图

で1.90m、中央部において最大の2.23mを測り、プランは中央部でやや膨らみをもつが、ほぼ正方形をなす。天井部はドーム状を呈しており、棟線は高さ30cm程までしか認められない。天井までの現存高は1.42mである。床面は非常に脆弱であり、明確な床面は、壁際など部分的にしか検出することができなかった。しかし、残存している床面のレベルはほぼ等しく、屍床その他の施設が造り付けられていた可能性は低いものと考えられる。横穴墓の周辺はかつて芋畑として使用されており、すぐ西隣りには芋の貯蔵穴がかつて存在していた。したがって、この横穴墓は芋の貯蔵穴として二次利用され、その際に攪乱を受けた可能性がある。玄門は幅0.5mである。上述のように、天井部は破壊されているが、閉塞石の状況から考慮すると、本来の高さも現状とほとんど変わらないと考えられ、したがって玄門の高さは0.5m程に想定できる。閉塞石は6回目の噴火による阿蘇熔結凝灰岩⁽²⁾製であり、横穴墓を穿った岩盤とは異なった、堅緻な石材を使用している。幅60cm、高さ86cmであり、形状はほぼ長方形を呈する。厚さは上部で8cm、下部で12cmを測り、中央にやや膨らみをもつ。

墓道には、玄門部から25cm程のところで長さ77cm、深さ13cmの溝状の掘り込みが認められる。この横穴墓は閉塞石をその中の嵌め込ませ、玄門に立て掛けるような状態で閉塞を行っている。この掘り込み部分の東側隅には10cm大と20cm大の2個の凝灰岩片が認められた。これは閉塞石の剥落その他の、二次的な要因によるものではなく、閉塞石を固定するために使用された根石であると考えられる。横穴墓の前面は一部玄室天井部に及ぶまで削平を受け、また芋畑として利用されるなど、何度も攪乱を受けている。閉塞石は右袖部にはかかっておらず、玄門に対してやや西側にずれており、さらに根石も部分的にしか残存していない。以上から閉塞石は若干移動しているものと考えられ、本来は根石が残存している部分、つまり現在の位置よりやや東側に存在していたのであろう。

閉塞石前面に1.2m×1.5mのグリッドを設定し、発掘を行った。層序は以下の通りである。

I層：褐色土層(Hue7.5YR4/4)。粘性はなく、粒子が細かい。凝灰岩片を含んでいる。

II層：暗褐色土層(Hue7.5YR3/4)。炭化物を多く含み、I層に比して土色が暗い。土質はI層と同じである。

III層：にぶい褐色土層(Hue7.5YR5/3)。凝灰岩の基盤層であり、若干風化している。

III'層：土質・色調ともIII層と同じである。根石もこの層中に含まれる。

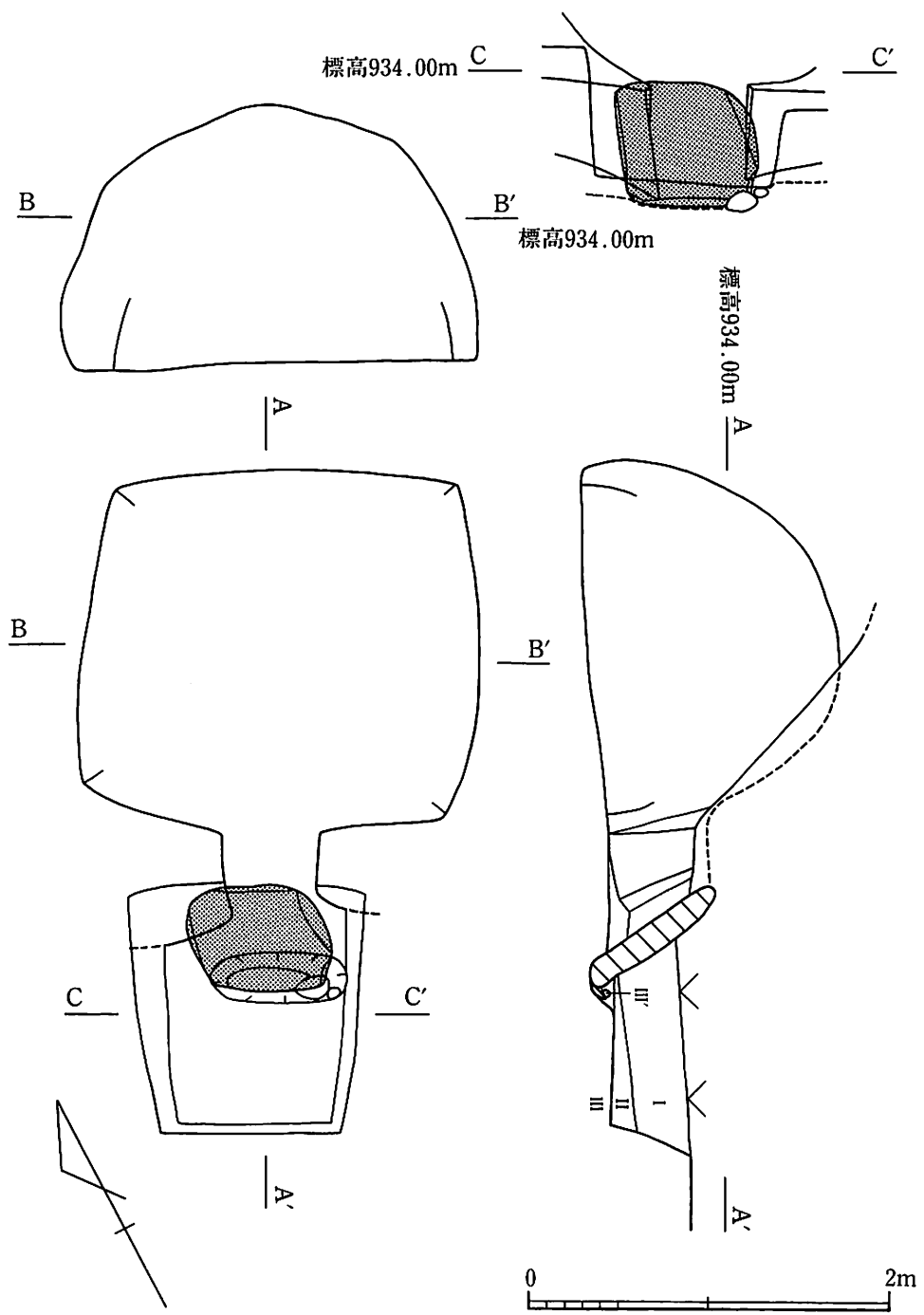
I・II層は攪乱層であり、竹の根による攪乱を激しく受けている。発掘区内では墓道の掘り込み部分は認められなかった。なお、遺物は確認することができなかった。(清田志野)

註

(1) 松本幡郎氏のご教示による。

(2) (1)に同じ。

なお、阿蘇熔結凝灰岩の形成時期に関しては、松本幡郎「阿蘇外輪山の噴火と噴出物」『阿蘇火山』東海大学出版会、1981年による。



第24圖 北平橫穴墓実測圖

3. まとめ (第25図)

今回調査した北平横穴墓は五ヶ瀬川の支流である旅草川の南岸に位置し、現在までの状況では、五ヶ瀬上流域に存在する横穴墓の最西端にあたる。熊本県側の蘇陽町内においてはこの他に横穴墓の存在は確認されておらず、五ヶ瀬川上流域において最も横穴墓が濃密に分布するのは、宮崎県西臼杵郡高千穂町を中心とする一帯である(第25図)。五ヶ瀬川上流域における典型的な横穴墓の特徴としては、1) 玄室の天井高が低い 2) 玄室中央の通路を挟んで左右に屍床を持つ 3) その屍床には石枕を造り付けるものが多い、を挙げることができ⁽¹⁾、この地域の横穴墓は単純に従来の「肥後型」横穴墓の範疇では捉えきれないことが指摘されている。この地域では「コ」の字形の屍床配置をした横穴墓は現在のところ認められず、また一屍床内に複数の石枕を有するものも存在し、従来の基本的な「肥後型」(=方形プラン、ドーム形天井、「コ」の字形の屍床配置)とはある程度の共通性は認めつつも、この地域の独自性を指摘することは可能である⁽²⁾。

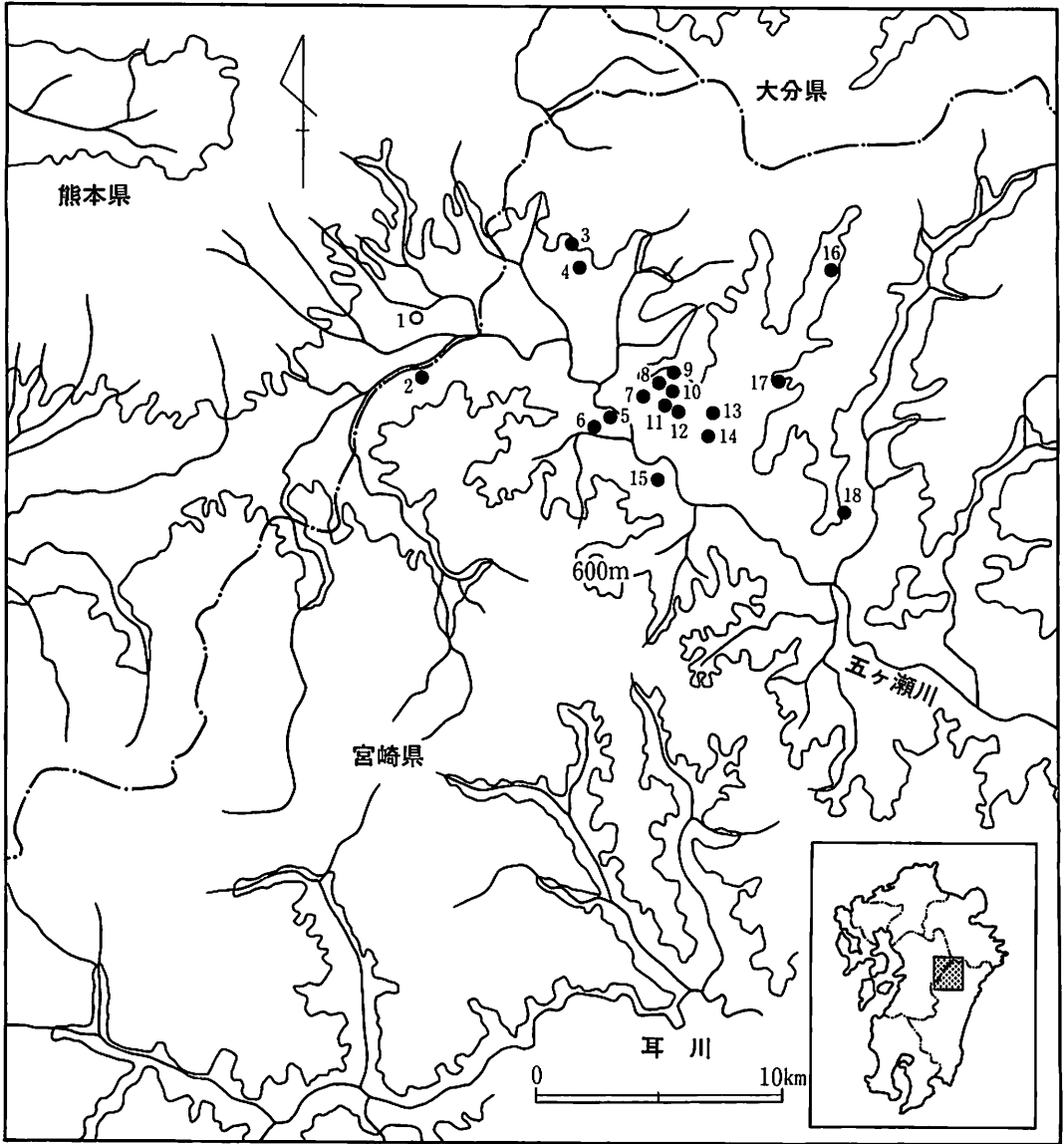
今回調査した北平横穴墓は方形の玄室プランやドーム形天井を持ち、床面は攪乱を受けており判然としないが、残存した部分のみを限り、屍床その他の施設が造り付けられていた可能性は低い。五ヶ瀬上流域の横穴墓においても無屍床・ドーム形天井をもつものが存在するが、天井が低平であり、北平横穴墓のようにしっかりとした高さを有するものではない。北平横穴墓は「肥後型」横穴墓の範疇で捉えることができるものであるといえる。しかし閉塞に関しては、墓道に掘り込みを設け、その中に1枚石による閉塞石を嵌め込んで閉塞するという手法を用いており、九州山間部の横穴墓と共通する要素をも兼ね備えている。

最近、阿蘇地域では五ヶ瀬川上流域に近接した阿蘇郡高森町において横穴墓の存在が確認されている(高塚横穴墓群)。この横穴墓群は五ヶ瀬川上流域の横穴墓とのつながりが想定されており、阿蘇地域も含めた九州山間部一帯で五ヶ瀬川上流域の横穴墓は考える必要がある。また九州山間部には御塚横穴墓群⁽³⁾(阿蘇郡阿蘇町)・南平横穴墓群⁽⁴⁾など初現期に相当する横穴墓が存在しており、五ヶ瀬上流域における横穴墓の成立は従来からの単なる「肥後型」横穴墓からの影響だけにとどまらず、より多角的に考える必要があろう。それには当地域及び周辺地域における一層の資料の充実が望まれる。

(藏富士寛)

註

- (1) 長津宗重「日向の横穴墓」「おおいた考古」第4集、大分県考古学会、1991年。
- (2) 最近では当地域における横穴墓を「造り出しの枕を有する菊池川中流域の横穴の影響下に「コ」字形の三屍床のうちの奥屍床を省略して受容された」とする解釈がある。長津宗重「吾平原横穴群」「宮崎県史 資料編 考古2」、1993年。
- (3) 熊本大学考古学研究室「阿蘇町塔ノ木古墳群ドンベ塚 阿蘇町御塚横穴群A・B穴」研究室活動報告13、1982年。
- (4) 北郷泰道・田尻隆介「南平横穴墓群発掘調査」「宮崎県文化財調査報告書」第23集、宮崎県教育委員会、1981年。



第25図 五ヶ瀬川上流域横穴墓分布図

- | | | |
|------------|------------|------------|
| 1 北平横穴墓 | 7 塩市横穴墓群 | 13 桑水横穴墓 |
| 2 下赤谷横穴墓群 | 8 成木横穴墓群 | 14 枳又横穴墓 |
| 3 田原南平横穴墓群 | 9 池ノ川横穴墓群 | 15 大久保横穴墓 |
| 4 田原染野横穴墓群 | 10 吾平横穴墓群 | 16 春姫登横穴墓 |
| 5 押方横穴墓群 | 11 車迫横穴墓群 | 17 岩神上横穴墓群 |
| 6 辻平横穴墓群 | 12 吾平原横穴墓群 | 18 平清水横穴墓群 |